

囲地田遺跡 発掘調査報告書

1991

山形県
山形県教育委員会

かこ　ち　だ

囲地田遺跡 発掘調査報告書

平成 3 年 3 月

山形県
山形県教育委員会

序

本書は、平成2年度に山形県教育委員会が発掘調査を実施した囲地田遺跡の調査成果をまとめたものです。

囲地田遺跡は庄内平野の西南部の鶴岡市にあります。本地域では昭和62年から県営ほ場整備事業鶴岡西部地区がはじまり、これらに関連して本県教育委員会では清水新田遺跡、矢馳A遺跡、矢馳B遺跡、助作遺跡、山田遺跡等の古墳時代の集落跡の発掘調査を進めてまいりました。これらの調査により、古墳時代の遺跡群としては日本海側の北限に位置する当地域への古墳文化の伝播が次第に明らかとなってまいりました。

本遺跡の発掘調査は、ほ場整備事業の水路予定部分を対象とした部分的なものでしたが、溝跡から古墳時代の6世紀中葉の土器群と平安時代初頭の土器群が出土しました。今回の調査によって、本遺跡を含む一帯では、古墳時代の6世紀には数カ所の同時存在の集落が形成されていたことを裏付ける資料が得られました。また、庄内平野南部ではこれまでに発見例が少なかった平安時代初頭の資料も出土しました。

埋蔵文化財は私たちの先祖が長い歴史を育んできたことを明らかにしてくれる貴重な文化遺産です。これを愛護し、子孫へ伝えていくことは現代に生きる私たちの重要な責務です。

山形県教育委員会では「心広くたくましい県民の育成」と地域文化の環境づくり進めるために、今後とも県民福祉の向上を目的とした地域社会の整備との調整を図りながら、埋蔵文化財の保護に努力を続けていく所存です。

最後になりましたが、調査に御協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げるとともに、本書が埋蔵文化財の保護・普及と研究の一助になれば幸いと存じます。

平成3年3月

山形県教育委員会教育長 木場清耕

例　　言

- 1 本書は山形県農林水産部の委託を受けて、山形県教育委員会が平成2年度に実施した、
県営ほ場整備事業鶴岡西部事業に伴う囲地田遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は平成2年7月2日～7月31日までと9月25日～9月28日までの延べ24日間
にわたって実施した。
- 3 遺跡の所在地は山形県鶴岡市大字白山字囲地田である。
- 4 調査体制は下記のとおりである。

調査主体 山形県教育委員会

調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者 事務局長捕佐 佐々木洋治

　　調査班長 渋谷 孝雄

事務局 事務局長 土門 紹徳

　　事務局長捕佐 斎藤 久子

　　経理班長 佐藤 庄一 野尻 侃

　　主任事務員 新関 紘子 賀間 秀男 永井 健郎 渋江 正義

- 5 調査にあたっては鶴岡市教育委員会、赤川土地改良事務所、青龍寺川土地改良区、大泉土地改良区、庄内教育事務所など関係機関の協力を得た。

- 6 本書の作成は渋谷孝雄が担当した。編集は渋谷孝雄、安部 実が担当し、全体の総括
を佐々木洋治が行った。

- 7 調査記録、出土遺物は山形県教育委員会が一括保管している。

- 8 本書の挿図の縮尺はそれぞれにスケールを入れて示した。挿図並びに本文中で用いた
略記号はST：竪穴住居、SK：土坑、SD：溝跡、SX：性格不明の落ち込み、RP：土
器、RW：木製品を表している。

- 9 遺構平面図中の方位は真北を示す。遺物実測図の土器で断面白抜きは土師器、黒ベタ
は須恵器、点描は赤焼土器を表し、土師器内面の点描は内面が黒色化処理が施されてい
ることを示す。

目 次	
I 調査に至る経過	1
II 遺跡の立地と環境	
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	2
III 調査の経過	5
IV 遺跡の概観	
1 層序の概要	7
VI まとめ	
1 古墳時代の遺構と遺物	35
2 平安時代の遺構と遺物	35

挿図目次

第1図 遺跡位置図	3	第11図 出土土器（3）	24
第2図 トレンチ配置図	6	第12図 出土土器（4）	25
第3図 層序、第3トレンチ遺構分布図	9	第13図 出土土器（5）	26
第4図 第2トレンチ遺構分布図	11	第14図 出土土器（6）	27
第5図 SD1平面図（1）	13	第15図 出土土器（7）	28
第6図 SD1平面図（2）	14	第16図 出土土器（8）	29
第7図 SD1平面図（3）	15	第17図 出土土器（9）	30
第8図 SD2平面・断面図、第2、3トレンチ検出遺構平面図	17	第18図 出土土器（10）、陶器、石製品	31
第9図 出土土器（1）	22	第19図 SD2出土木製品	32
第10図 出土土器（2）	23	第20図 土器分類図	36

附表目次

表-1 出土遺物観察表（1）	33	表-2 出土遺物観察表（2）	34
----------------	----	----------------	----

図版目次

図版1 遺跡遠景 SD1完掘(東半)	RP27出土状況他
図版2 SD1 RP32~44出土状況 SD1 RP45~51出土状況	図版7 第2トレンチ20~45区土色変化 第2トレンチSD2調査状況他
図版3 第1トレンチ全景 第2トレンチ発掘前他	図版8 SD2 RP109、110出土状況 SD2 RP113出土状況他
図版4 SD1 RP4、5、6出土状況 SD1 RP7出土状況他	図版9 出土遺物（1） 図版10 出土遺物（2）
図版5 SD1 RP16出土状況 SD1 RP17出土状況他	図版11 出土遺物（3） 図版12 出土遺物（4）
図版6 SD1 RP26出土状況 SD1	

I 調査に至る経過

囲地田遺跡は平成元年10月に発見された遺跡である。山形県教育委員会では毎年国や県の開発関係機関・部局に対し、埋蔵文化財包蔵地とその周辺の開発計画の有無について、文書で照会し、その回答を受けて事業計画と埋蔵文化財の関係について聴取を行っている。また、ほ場整備事業等の大規模開発については周知の埋蔵文化財の有無にかかわらず、事業計画の聴取を実施している。この中で、事業計画が埋蔵文化財に影響を及ぼす可能性のある場合や、地理的にみて、事業計画地内に埋蔵文化財包蔵地の存在が予想される場合には、遺跡詳細分布調査を実施し、その結果を基にして遺跡の保護について協議を行うこと正在している。

県営ほ場整備事業（鶴岡西部地区）では、昭和61年度から埋蔵文化財と事業計画の調整が始まり、平成元年まで矢馳A遺跡等の周知の遺跡5箇所と、大道下遺跡等新規発見遺跡7遺跡について協議が行われた。面工事による破壊を最小限にする方向性で協議が進められたが、やむを得ない場合には緊急発掘調査で記録保存を図ることとなり、7遺跡で緊急発掘調査、5遺跡で水路を対象とした立会い調査の保護措置がなされた。

平成2年度の事業実施予定地内には、周知の遺跡はなかったが、これまでに新規発見の遺跡が7箇所あったことから、2年度の事業区内の分布調査を実施し、遺跡の有無を把握する必要があると判断された。表面踏査は平成元年10月26日に行われ、白山集落の南東部の水田中に古墳時代の土師器片が散布することが確認され、遺跡である可能性が生じたため、事業主体の庄内支庁経済部赤川土地改良事務所と協議を行い、試掘調査が行われることとなった。試掘調査は10月30・31日に行われ、遺物の散布する範囲とその周辺で310箇所の試掘を行った。その結果、東西170m、南北330m、面積54,700m²の広がりをもつ古墳時代の遺跡であることが判明し、字名から囲地田遺跡として登録されることとなった。

山形県教育委員会では、この調査結果を平成元年12月18日付け文化第820号で赤川土地改良事務所長に報告するとともに、遺跡の保護について協議を進めた。調査の結果は設計に反映され、面工事は表土の中で実施されることになり、遺構確認面である地山の削平は、遺跡内で行われないことになった。このため、遺跡の大半は現状のまま保存できる見通しつなったが、現在の用排水路をさらに掘削してU字溝を埋設する工事と用水管を埋置する工事により、部分的に遺構確認面以下に達することは避け得なかつたことにより、この部分に限って緊急発掘調査を実施して記録で保存する運びとなつた。

発掘調査は平成2年度事業として当初予算に組み込まれ、転作した麦の収穫後の7月に実施することで事業との調整が図られた。

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

畠地田遺跡は鶴岡市役所の西3.5km、白山集落の南方の水田中に位置する。遺跡の所在する大泉地区は、庄内平野の南西端に位置し、西方を標高150～280mの高館山地、南方を標高458.5mの金峰山を主峰とする200～400mの金峰山地に限られた河間低地に立地する。遺跡の標高は15.0～15.3mで、現在ではほぼ平坦地となっている。遺跡の西側を金峰山を源とする湯尻川が北流し、地形分類図「鶴岡」では遺跡の所在する地点は河間低地、湯尻川を挟んだ西側は後背湿地として、大きく区分されている。

現在の地形は水田經營の効率化を図るために、過去に幾度となく繰り返された、面の均一化により、ミクロ的には自然地形が改変されたものと認識でき、本遺跡が営まれた古墳時代後期や平安時代は、旧河川跡、自然堤防、後背湿地が複雑に入り組んだ起伏に富む地形となっていたものと推測される。古墳時代や平安時代ではより高燥な自然堤防上に居住の場としていたことは、この地域のこれまでの発掘調査の結果でも裏付けられている（阿部・吉田・黒坂1988、黒坂1988、阿部・吉田1989、黒坂1991）。

2 歴史的環境

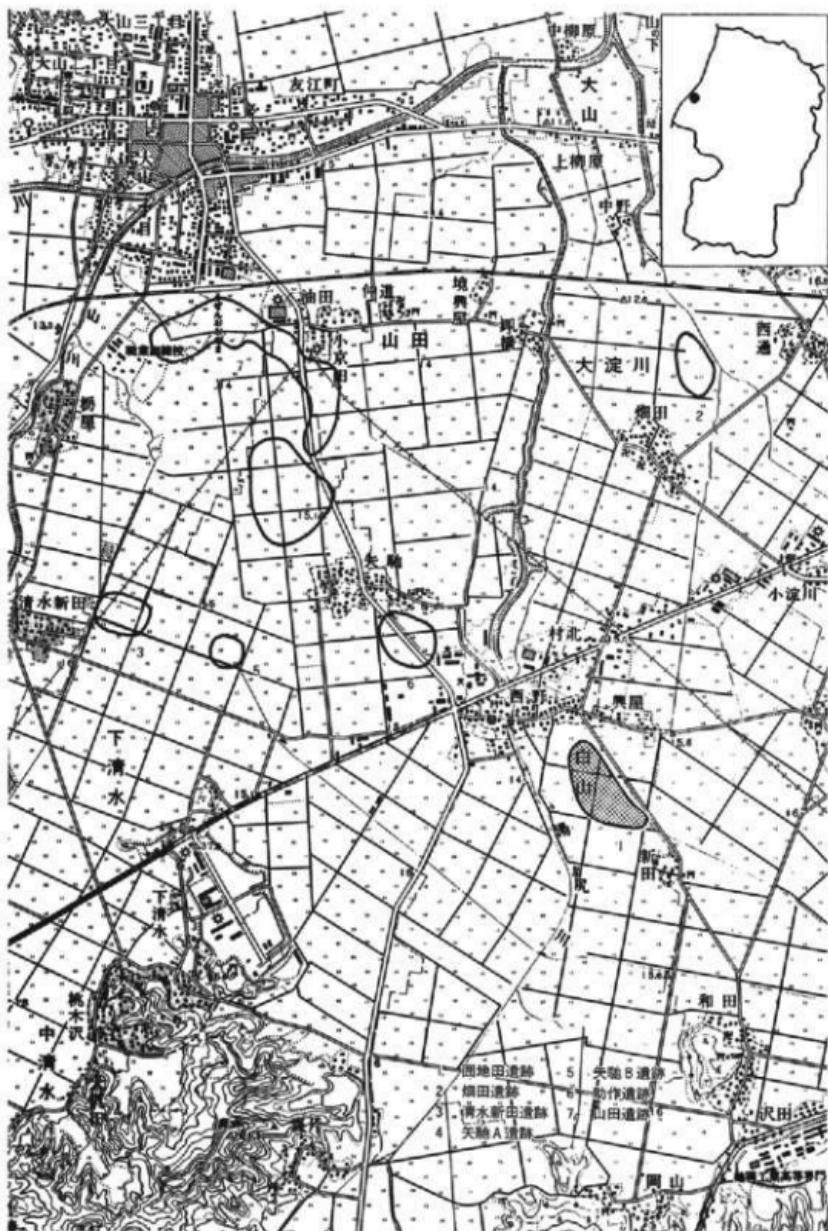
庄内地方で今まで確認された古墳時代の遺跡は、断片的で詳細が不明などを含めても10箇所をやや上回る程度であり、村山、置賜等内陸南北に比較しても極めて少ないと指摘できる。そして、そのうちの8箇所までが本遺跡の周辺に所在し、鶴岡市より北の地域では集落はもとより、断片的な資料も多くはない。庄内平野の歴史時代の遺跡は決して少なくはないが、古墳時代に遡れる遺跡がほとんどない理由として①古墳文化の波及は鶴岡市南西部までで、それより北には波及しなかった。②平野部の地中深く埋もれており、発見しにくい。の2点が考えられるが、現在のところ②の可能性も否定できない状況にある。酒田市関B遺跡（佐藤・野尻1983）や藤島町三和遺跡（酒井1986）の古墳時代前期の包含層不明の土師器の存在は②の可能性も有り得ることを示唆している。

いずれにしても、本遺跡の所在する鶴岡市西部は古墳時代の遺跡の分布密度が庄内地方で最も高い地域であることは今後の調査が進んでも覆されることはないであろうし、庄内の古墳文化を考える上で、極めて重要な位置を占めているという評価は変わることがない。

以下に当該地域の古墳時代遺跡についてその概要を述べる。

畠田遺跡

本遺跡の北北東2kmに位置する。標高は12mを測る。昭和63年に発見・登録され、平成元年度に立会い調査が実施された。地目は水田と畠地である。溝跡などの遺構から古墳前



第1図 遺跡位置図 (S = 1 : 25,000)

期～中期の土器がまとまって出土した。本地域では最も古い古墳時代の遺跡である。平成4年度以降に東北横断自動車道酒田線の建設に伴う緊急発掘調査が予定されており、古墳時代前期の様相が明らかにされるものと期待される（山形県教育委員会1990）。

清水新田遺跡

本遺跡は西南西約2.2kmに位置し、標高は12.5mを測る。地目は水田であり、昭和62年度に延べ42日間にわたる緊急発掘調査が行われ、竪穴住居跡10棟の他、溝跡などが発見され、整理箱で50箱ほどの土師器や須恵器が出土した。遺物は良好な一括品が得られ、庄内南半地域の6世紀前半を代表するとして「清水新田式」の型式設定が可能であるとされた（阿部他1988）。

菱津古墳

本遺跡の西北西約4.7kmに位置する。明治43年に菱津火打崎で発見された長持型組合せ式石棺で墳丘や副葬品の存在は不明である。凝灰岩製で繩掛け突起等の存在から古墳時代後期6世紀前半のものと位置づけられている（川崎1980）。時期から判断し、清水新田遺跡と併行関係にあると考えられる古墳である。

矢馳A遺跡

本遺跡の北西約2kmに位置し、標高は14mを測る。地目は水田で、昭和31年に暗渠排水工事中に多量の土師器が出土し、川崎利夫氏によって「矢馳式」が提唱された学史的な遺跡である（川崎1972）。昭和62年度に県営ほ場整備事業（鶴岡西部地区）に伴って緊急発掘調査が実施された。約3,000m²の調査区から竪穴住居跡24棟や、土器を含む溝跡群が検出され、整理箱で200箱の土師器や須恵器が出土した。土器の検討から6世紀の第2四半期に位置づけられ、最低二型式に分離して把握できると予測された（阿部他1988）。

矢馳B遺跡

本遺跡の西北西1.7kmの水田中に位置し、昭和62年度に用・排水路を対象とする緊急発掘調査が行われた。約360m²という小規模な発掘調査であったが清水新田遺跡とほぼ同時期の竪穴住居跡が検出されている（阿部他1988）。

山田遺跡

本遺跡の西北西1.7kmの水田中に位置し、昭和63年度に県営ほ場整備事業に伴い、一部トレンチ調査が行われたが古墳時代の造構は検出されなかった。古墳時代については不明な点が多い。

助作遺跡

本遺跡の北西約1kmに位置する。大正年間に須恵器が出土したことにより、その存在が知られるようになり、昭和55年に小野忍氏がTK10号窯に相当すると報告している（小野

1980)。昭和63年に国道7号線鶴岡バイパス建設工事と県営ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査が実施され、竪穴住居跡4棟と大溝、土坑等が検出され、住居跡、大溝跡からは良好な一括土器も出土した。出土した土師器、須恵器は6世紀の第2～第3四半期に位置づけられた(黒坂1990、阿部・吉田1989)。

III 調査の経過

発掘調査の対象地区は掘削により破壊される恐れのある排水路と用水管埋設地の合わせて3箇所で、北から第1トレンチ(用水管)、第2トレンチ(排水路)、第3トレンチ(用水管)と名付けた。トレンチの幅は原則として第1トレンチが2m、第2トレンチが5m、第3トレンチが3mであり、各トレンチの間隔は第1、2間が90m、第2、3間が70mである。発掘面積は合計で2,130m²である。

発掘調査は平成2年7月2日から31日までと9月25日から28日まで、2回に分けて延べ24日間実施した。

以下にその経過を記す。

7月2日～6日

2日に事務所の設営と器材の搬入を行い、午後2時から関係者で鍛入れ式を行う。3日からパックホーによる表土除去の作業に入り、第1トレンチ、第2トレンチ、第3トレンチの順で実施し、9月に調査を予定している豆軒作と未同意者の水田部分を残し、6日までに終了した。表土の除去が終ったトレンチから、区割りの杭打ちとスコップ、ジョレンを使った粗掘り、面整理に入った。杭打ち作業は6日までに終了した。

7月9日～13日

降雨により、各トレンチとも冠水状態となったため、トレンチ両側に排水を兼ねた断面観察用の小トレンチを設定し、掘り下げを行った。第1トレンチは面整理が終了。トレンチの西側にある農道をつくる際の土取り場となっているため、攪乱が著しく、遺構は確認できなかった。写真撮影を行い、断面図を作成して調査を終了する。第2トレンチは44区以東について1回目の面整理が終了。盤下げるによる攪乱部が多い。第3トレンチは20区以東の面整理が終了する。土師器を含む遺構とみられる土色変化が認められた。

7月16日～20日

第2トレンチの46区以西、第3トレンチの30区以西の面整理を行い、第2トレンチで溝跡SD1を検出した。SD1は40分の1の検出状況平面図を作成し、中央を通る現排水路をトレンチ北端に付替えた後、精査に入る。20日までに掘り下げをほぼ終了し、54個体の



第2図 トレンチ配置図

土器の登録を行った。土器の出土層準は溝の底面で、一括土器以外の破片は極めて少ない。

7月23日～27日

第1トレンチは搅乱部を掘り下げてダメ押しを行った。搅乱部から中世陶器が3点出土したが原位置は不明。第2トレンチはSD2の遺物出土状況の平面図の作成、断面図の作成を行い、写真撮影後に遺物の収納を行った。45区以東では2回目の面整理を行い、SD2、SK3、SD4、SX5を検出し、精査を行った。SD2から平安時代の一括土器12個体が出土し、簀串、円盤状木製品、箸等も出土した。SK3から古墳時代の土師器壺RP55aが出土した。SD4は新しい時期の埋跡であることも判明した。第3トレンチは2回目の面精査を行い、14区以東で土坑6、7、9を検出し、精査を行った。

7月30・31日

第2、3トレンチで検出した遺構の平面図の作成と写真撮影を行うと共に、搅乱部を掘り下げてダメ押しを行った。31日に関係者に対する現地説明会を開催し、調査を終了した。

9月25日～28日

SD1に係る2-47～52区、SD2に係る2-22～29区と3-22～29区の3箇所の調査を行った。2-47～52区ではSD1の南半が検出され、RP55b、RP56の2個体の土師器が出土した。また、2-22～29区ではSD2が検出されRP113～115の3個体の平安時代の土器が出土した。3-22～29区は搅乱部が多く、遺構・遺物とも検出できなかった。28日で今年度予定したすべての調査が終了した。

IV 遺跡の概観

1 層序の概要（第3図）

第1、第2、第3トレンチで観察された基本的な層序は第3図に示したとおりである。Ia層は水田耕作土で毎年搅乱される層。Ib層は水田基盤土であるが、昭和30年代の区画整理で生成されたと考えられる。II層は黒色土で、土師器の小破片を含む。生成時期は不明である。III層は本遺跡で検出された古墳時代、平安時代の遺構の地山であり、グライ化している。古墳時代の遺構が検出された第2トレンチ46区以西、第3トレンチ14区以東では後世の削平が認められ、各トレンチ内で、この層を掘り込んでいる天地返しが認められた。IV層はIII層の下位にあり、酸化したシルト粒を多量含んでいる。第1トレンチと第3トレンチで確認された。

2 遺構と遺物の分布（第3・4図）

第1トレンチでは中世陶器や須恵器が搅乱層から出土したが、この時代の遺構は検出で

きなかった。

第2トレンチは現在の用排水路を挟んで幅5mの調査を行った。13~23区までの約半分は盤下げによる天地返しが認められ、遺構の存在を確認できなかった。24~27区ではII層を除去した段階で大溝SD2が検出された。この溝の堆積土から平安時代の土器等が出土した。この溝の上場から8m西の28区で古墳時代の土坑SK3が検出され、壺1個体が出土している。31・32区では南北に走る溝SD4が検出された。堆積土から須須による網目文を描いた磁器碗が出土しており、近世以降の所産と考えられる。41区には天地返しによる搅乱層を剥いた段階で古墳時代の土師器片を含む不整形な落込みSX5が検出された。46~61区間では現排水路を挟んで、ほぼ東西の走向をもって、緩く蛇行する溝跡SD1が検出された。この溝跡の56以東から古墳時代の土師器と須恵器が56個体出土した。これらの土器の大半は底部から口縁までの全容を知り得るもので、破片は極めて少なかった。なお、57区の西からは破片の出土もなく、無遺物であった。

第3トレンチは14区以西は天地返しが著しく、古墳時代、平安時代の遺構は認められなかった。0~13区内は盤下げによる天地返しがなく、地山面も標高16m45cm前後と今回の調査区の中では最も高い。この地区で古墳時代の土師器を含む土坑3基とピット5基が検出された。また、この地区的II層から土師器の壺、高壺、甕等の破片が整理箱にして約1箱分出土したが、実測できるものは1点もなかった。

V 遺構と遺物

1 遺構

本遺跡で検出した遺構は溝跡、土坑、ピット、性格不明の落込みがある。以下登録順にその概要を述べる。

SD1(第4~7図、図版1~6)

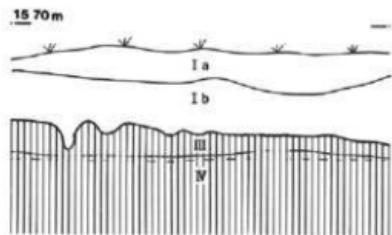
第2トレンチの46区から61区で検出した。確認面はIII層上面である。47区の西端から51区と59~61区では北と南の上場、下場を確認できたが、52~59区の北辺は既存の用排水路によって、既に壊されており、53区の西寄りから56区の東寄りまでは南辺が調査区外となっている。検出した範囲で、全長72mを割り、上場幅は最大3.6m、最小2.4mで、検出面から底面までの深さは最大で25cmである。

溝の堆積土は以下のとおりである。

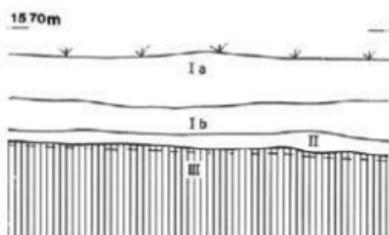
1:2.5Y4/4 オリーブ褐色粗砂(7.5Y4/6褐色粗砂の部分もある)

2:5GY4/1 暗オリーブ灰色シルト質細砂(5Y4/4灰色粘土ブロックを含む)

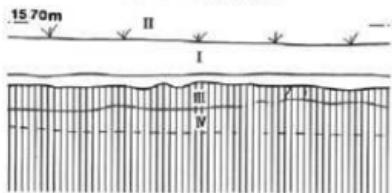
第1トレンチ30区東壁



第2トレンチ28区北壁

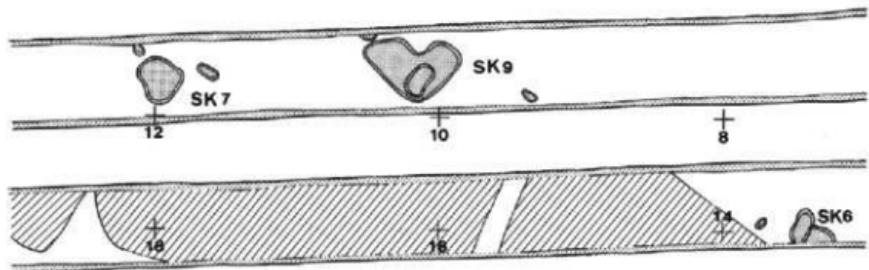


第3トレンチ12区北壁

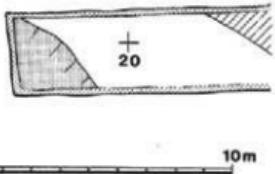


0 2m

Ia : 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質粘土
 Ib : 10YR3/4 増褐色シルト質粘土
 II : 2.5Y3/2 黒褐色シルト
 III : 2.5GY4/1 増オリーブ灰色細砂（シルト混り）
 IV : IIIに2.5Y4/3オリーブ褐色シルトが多量混る



- : 地山
- : 遺構
- ▨ : 天地返しによる擾乱
- ▨▨ : 排水トレンチ



第3図 層序、第3トレンチ遺構分布図

- 3 a1 : 2.5Y5/4 黄褐色シルト混り粗砂
 3 a2 : 2.5Y4/6 オリーブ褐色シルト混り粗砂
 3 b : 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト質細砂
 3 c : 7.5YR4/4 褐色砂
 3 d : 2.5GY4/4 暗オリーブ灰色シルト質粘土 (大粒の炭化物を若干含む)

遺物が含まれるのは 3 a1~3 d の各層であるが、ほとんどが溝の底面にのっているとみてよい。

47区からは土師器壺の口縁部破片、体部破片が17点出土したが、復元・実測が可能なものは出土しなかった。遺物の集中域からは外れていると考えられる。

48~49区は遺物の集中域とみてよい。RP33~54と56の合わせて23個体の土師器を登録した。RP40、54の壺2個体は復元できなかったが、RP38が2個体、RP44が3個体、RP46が2個体となり、さらに、登録しなかった壺1個体も復元できたため、26個体となった。内訳は壺8個体、高壺4個体、鉢1個体、壺11個体、壺もしくは高壺となるもの1個体である。出土状況からみて(図版2)強い一括性を有する土器群とみてよいだろう。

50区で高壺(RP55b)が1個体出土した。

51区ではRP2~6、31の6個体の土師器を登録した。この中でRP2は壺の口縁部から体部上半にかけての破片で復元できなかったが、RP4が2個体となり、結果的に6個体となった。内訳は壺が3個体、鉢が1個体、壺が2個体である。

52区ではほぼ等間隔でRP7、8、9の3個体の土師器壺が出土した。

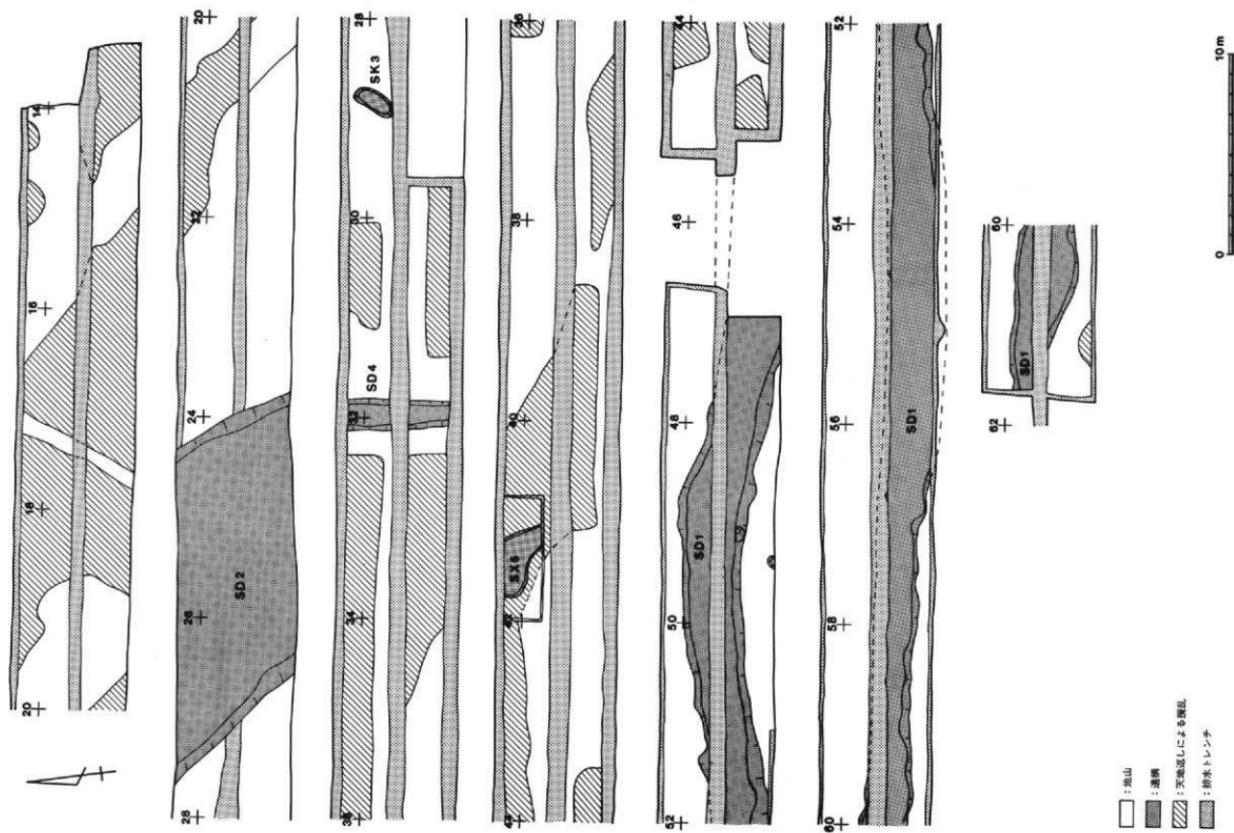
53区では壺1個体(RP10)を登録したが、この他、須恵器壺蓋の破片も出土した。

54~56区では48~49区に次ぐ集中域となり、RP11~30までの20個体の土師器、須恵器を登録した。このうち、RP13(壺)、15(壺)、21(高壺)、30(壺)は復元不可能で、RP18、19とRP28、29は接合して1個体となった。この結果、図化できたものは土師器の壺が6個体、高壺が2個体、壺部資料が1個体、壺が3個体、壺が2個体、須恵器の壺身が1個体の計15個体となった。

SD2(第8図 図版7)

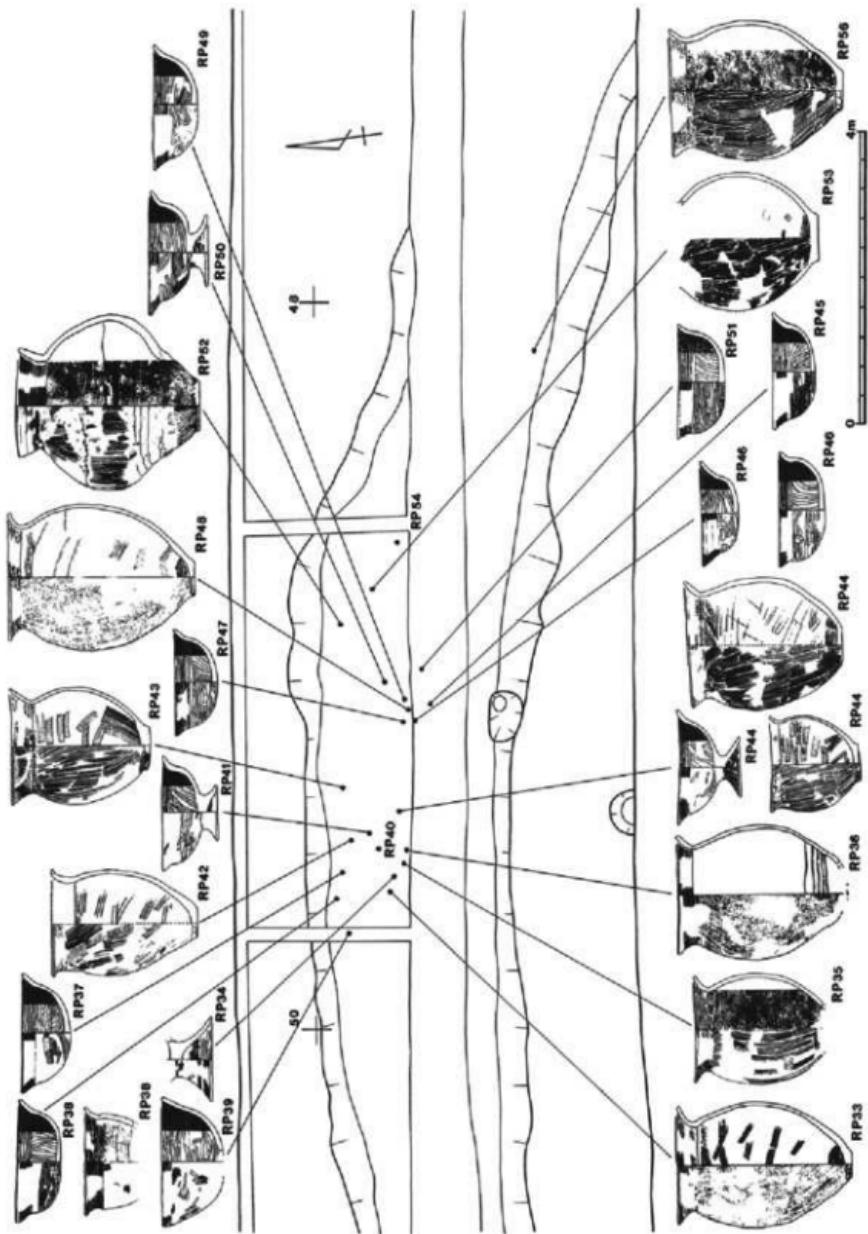
第2トレントの23区から27区で検出した南北の走向をもつ大溝である。確認面はⅢ層上面である。上場幅は約12.5mを測り、東端より約5mの位置で一旦立ち上がって2段の溝となっている。堆積土は大半が共通することから重複ではないと判断した。確認面から低面までの深さは、深いところで75cmを測り、溝の堆積土は以下のとおりである。

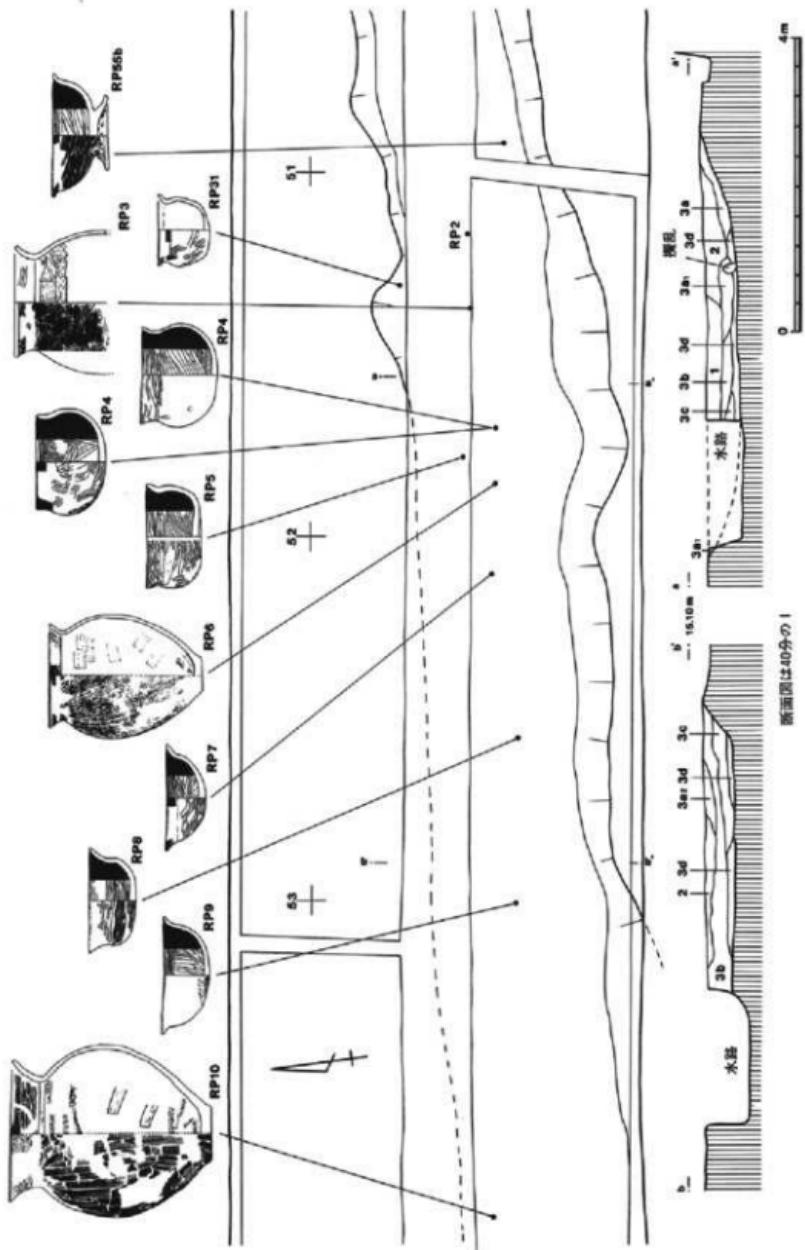
- 1 a : 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土 (粘性は1bより弱い)
 1 b : 10YR4/1 褐灰色粘土 (強い粘性をもつ)



第4図 第2トレンチ遺構分布図

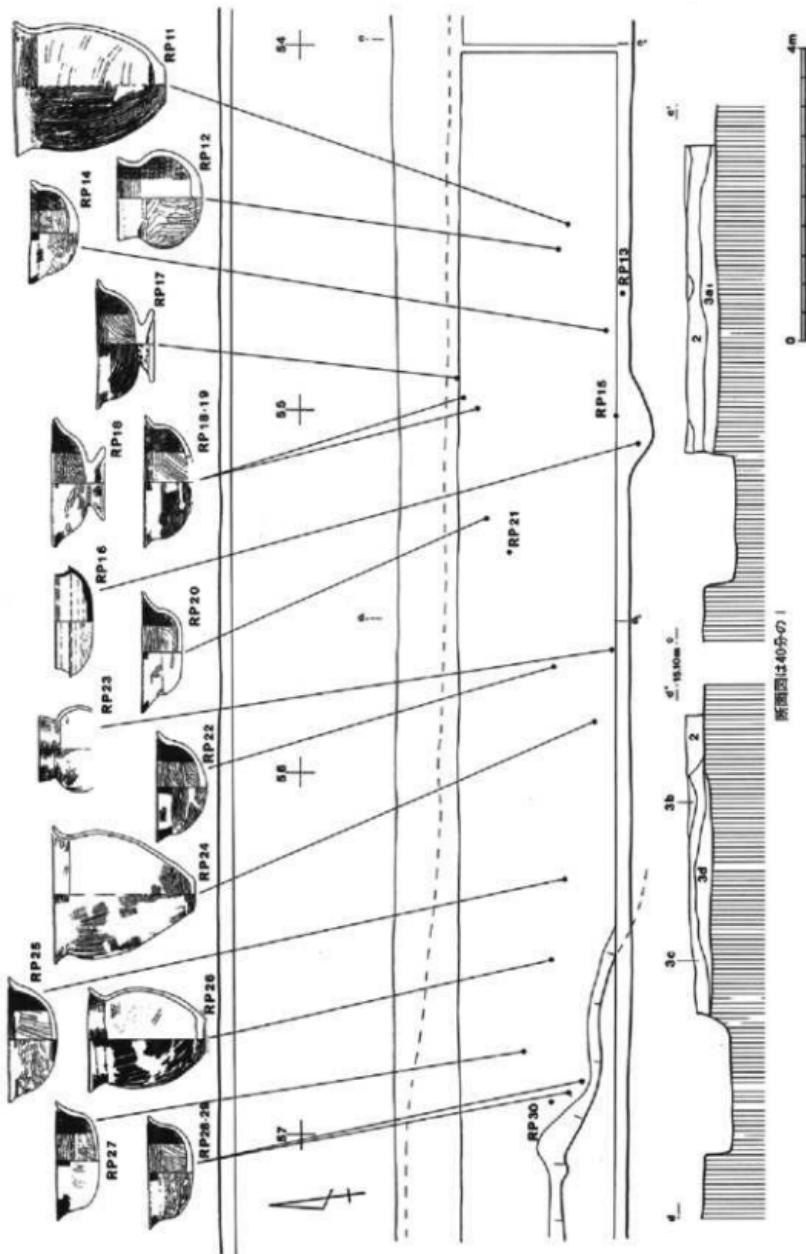
第5圖 SD1平剖面(1)





第6圖 SD1 平面圖(2)

第7図 SD1平面図(3)



- 2 a : 10YR1.7/1 黒色粘土（粘性は 1 a、b よりさらに強い）
2 b : 2.5GY5/1 オリーブ灰色粘土質シルト
2 c : 7.5Y4/2 灰オリーブ色粗砂混りシルト質粘土
3 a : 7.5Y5/2 灰オリーブ色粗砂混り粘土
3 b : 7.5Y6/2 灰オリーブ色粗砂混りシルト質粘土
4 : 7.5Y4/2 灰オリーブ色粗砂（10YR2/2 黑褐色粘土、2.5Y3/2 黑褐色シルト質粘土の大ブロックと斑状に混る）
5 a : 2.5GY3/1 暗オリーブ灰色砂質シルト（炭化物を多量含む）
5 b : 7.5Y3/2 オリーブ黑色粘土混り粗砂（炭化物、倒木、枝等の有機物を多量含む）
5 c : 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色シルト質粘土

このうち、5 b 層が平安時代の土器や木製品を含む層で、RW 1（独楽？）と RP101～115 まで 15 個体の土器を登録した。

出土した遺物は未登録のものを含め、須恵器 15 個体、赤焼土器 4 個体の実測可能な土器があり、この他、軒串、箸等の木製品がある。

S K 3 (第 8 図 図版 3)

第 2 トレンチ 29 区で検出した長楕円形の土坑である。長軸方向は北から東に約 40 度の振れをもっている。長径 215cm、短径 88cm を測り、確認面からの深さは 28cm である。堆積土の上部から伏せた状態で土師器壊が 1 個体出土した。

S K 6 (第 8 図)

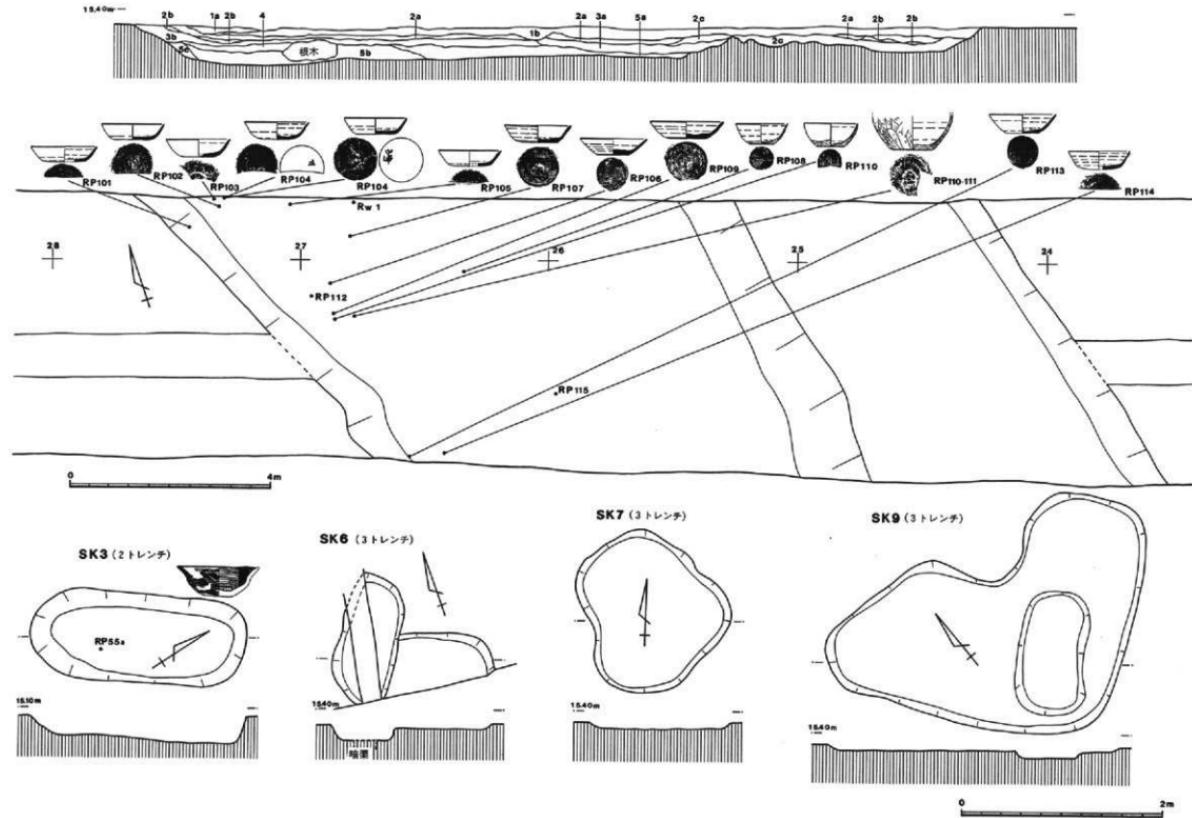
第 3 トレンチの 13 区で検出した 2 基が重複する土坑である。西側が新しい 6 a、東側が古い 6 b となり、6 a は南北約 120cm、東西 60cm で長楕円形のプランをもち確認面からの深さは 14cm を測る。6 b は東西 120cm 前後、南北 60cm 以上となり、確認面からの深さは 5cm と浅い。両者とも古墳時代の土師器の破片が出土しているが、復元・実測可能なものはなかった。底面に近いところがわずかに残存した土坑と考えられる。

S K 7 (第 8 図)

第 3 トレンチの 11・12 区の境界で検出した土坑である。長径 150cm、短径 120cm 前後の出入りのある不整な円形で、確認面からの深さは 7cm と浅い。古墳時代の土師器片が出土した。

S X 9 (第 8 図)

第 3 トレンチの 9・10 区で検出した L 字形の落込みで中央部で隅丸長方形の落込みが検出されたが堆積土は変化がなかった。確認面からの深さは浅いところで 5cm 前後、中央部でも 12cm と浅い。古墳時代の土師器片が出土している。



第8図 SD 2 平面断面図、第2、3 トレンチ検出遺構平面図

2 遺 物

今回の調査では土器、陶器、木製品などが整理箱で22箱出土した。古墳時代、平安時代、中世のものがあるが、古墳時代の土器が大半を占める。以下に時代ごとにその概要を記す。

(1) 古墳時代

土器 (第9~16図)

壺 (A)、高壺 (B)、鉢 (C)、甕 (D)、壺 (E) の各器種が存在し、さらに、形態等から細分される。壺、高壺はすべて内面に黒色化処理が施されている。

壺 (A)

I類：丸底からやや膨らみをもって立上がり、口縁部は長く外反する。体部と口縁部の境界の内面には明瞭な稜線が一周する。外部に段をもつa(1・2)と段のないb(3)がある。

II類：丸底から緩く立上がり、一旦直立気味になる口縁部が、中程から強く外反する。外面の体部と口縁部の境界には、明瞭な段が認められるが内面の稜は明確ではない(4)。

III類：丸底で丸味をもって立上がり、口縁部が強く外反する。口縁部の長さはI類とIV類の中間。体部と口縁部の境界に浅い段の認められるa(5)と段のないb(6・7・8)があり、内面の稜線は認められない。

IV類：丸底で丸味を持って立上がり、体部は強く膨らみ、口縁部は短く外反する。口縁部と体部の境界の外面に段ではなく、内面の稜線も認められない。口縁部の肥厚するa(9・10)、肥厚しないb(11)の二者がある。

V類：平底ふうの丸底から膨らみをもって立上がり、直上する位置で口縁部が外反する形態となる。玉縁のa(12~14)と素縁のb(15~17)がある。両者とも底部から口縁までなめらかなラインを描き外面の段、内面の稜は明確ではない。

VI類：丸底で球形の体部を持つ。ほぼ直立する口縁部を持つa(18)と外反するb(19)の二者がある。

VII類：平底でゆるく立上がり、直立後、すぐに外反する口縁をもつ。内面の口縁、体部の境界に稜線が一周する。第10図20の1点だけの出土である。

VIII類：平底で内弯気味にほぼ直角に立上がり、口縁部がくびれて外反する。口縁、体部の境界内部には明瞭な稜線が認められる(21)。

IX類：壺もしくは高壺の壺部資料である。22は壺であればIIIa類に入るが、23についてはI~VIII類に該当するものはない。

高壺 (B)

I類：A IIIb類の壺部をもち、口縁が長く外反する形態となる。口縁は玉縁状を呈する。脚部は直線的に長く開くものと、短いものがあり、前者をa(24)、後者をb(25)とする。柱実

部はきわめて短い。

II類：A Vb類の坏部をもち、口縁部は短く強く外反する。脚部は短く大きく開く形態となり、柱実部はほとんど認められない。第10図26に示した1点だけの出土である。

III類：A Vb類の坏部をもち、長めに外反する口縁部をもつ。脚部は柱実部がほとんどなく坏部と鋭角をなして開くa(27)と、一旦垂下して大きく開くb(28)がある。

IV類：丸底で体部と口縁部の境界に段のない坏部をもち、長く外反する口縁部の口唇部が上方に摘み出されて玉縁状となる形態をもつ。これと同じ形態の坏はない。脚部は柱実部がほとんどなく、直線的に開いている。第11図29に示した1点だけの出土である。

V類：30は坏身のない脚部資料であるが、完形品で同様な形態となるものはない。

鉢 (C)

2点の出土がある。31は全体的にラフな作りで、丸底から内湾して立上がり、一旦くびれた後「く」の字状に強く外反して口縁に至る。体部外面はハケメ、ミガキが観察され、口頸部はヨコナデが施される。ハケメ、ミガキ調整とも部分的である。内面にナデがある。32は口唇部に最大径のある鉢で内外面ともハケメとヘラナデが観察される。

甕 (D)

I類：器高が15cmに満たない小形の甕。第11図33に示した1点で口径、体部最大径とも器高を上回る。外面にハケメ、内面にヘラナデが認められる。

II類：器高15cm以上、20cm未満のもの。最大径は口縁部にあり、体部最大径はややこれを下回る。外面中位以上に縦方向のハケメ、下部は斜めもしくは横方向のハケメが施される。「く」の字状に外反する口頸部はハケメ調整後に丁寧なヨコナデが認められる。

III類：器高が20cm以上、25cm未満の甕。口縁部に最大径があるa(35~37)と口径と体部最大径がほぼ同じで胴張りになるb(38~40)、最大径が体部にあるc(41~43)がある。

35・36は内湾して立上がり、体部上位で若干の張りをもち、35は口縁が直上気味に立上り、玉縁状の口唇部となる。36の口縁は「く」の字状に外反し口唇部は外削ぎ状に角張っている。37は小さめの底部から直線状に急角度で立上がり、体部上位に張りをもつていて。38~40はやや緩やかなカーブを描いて、内湾気味に立上がり、頸部で一旦締まって口縁部は長く外反する。口唇部は外削ぎで角張る38と玉縁状になる39・40がある。

最大径が体部にある3点は丸底状の底部をもつ42、平底となる41、平底で体部が球状となる43がある。

IV類：器高が25cm以上で30cm未満の大形のもの。この類型はすべて体部に最大径をもつ。体部径に対し、器高がより高くなり、頸部のしまりが強いa(44)と頸部のしまりがそれほど強くないb(45~48)がある。体部外面の調整はヘラナデとなるものが主体を占め(44・45・

47・48)、ハケメは1点(46)だけである。

V類：器高が30cmを越える大形のもの。第15図49に示した1点だけの出土である。頸部のしまりが強く球状の体部となる。口縁は長く外反する。体部外面はハケメ調整が施され、内面は底部付近と口頸部にハケメが、体部中央部はヘラナデが認められる。

壺 (E)

I類：小形の壺でミガキ調整のa(50)とハケメ調整のb(51)がある。50は球形の体部をもち、体部外面は粗いヘラミガキで調整され、口頸部はヨコナデで調整される。口頸部内面は横方向の丁寧なヘラミガキが施されるが、体部には調整がない。体部を含めて黒色化処理が施されている。51は器形が50と類似するが口頸部が肥厚するなど若干の差異が認められる。内外面ともハケメ調整後に、それを消すようなナデが施される。

II類：大形の壺。1点だけの出土である。体部のほぼ中央に最大径がある。体部下半に成形の輪積み痕が残る。内外面ともハケメ調整が施され、口頸部にはヨコナデが認められる。

須恵器 (第16図)

壺蓋 (A)

破片が1点出土している(53)。口径140mmで体部は碗状の丸味がある。口縁部が短く外反し、内削ぎ的な成形となり、体部と天井部の境界に浅い沈線が巡る。

壺身 (B)

1点が出土している(54)。口縁部は直線的に内傾し、短めに立ち、口唇直下に内傾する段をもつ。体部下半に回転ヘラケズリ調整が施される。

(2) 平安時代

須恵器 (第17・18図)

壺蓋 (A)

天井部からツマミ部にかけての資料が1点出土している(55)。

高台付壺 (B)

急角度で立上がる底部資料が1点出土している。切り離しは回転ヘラ切りである。

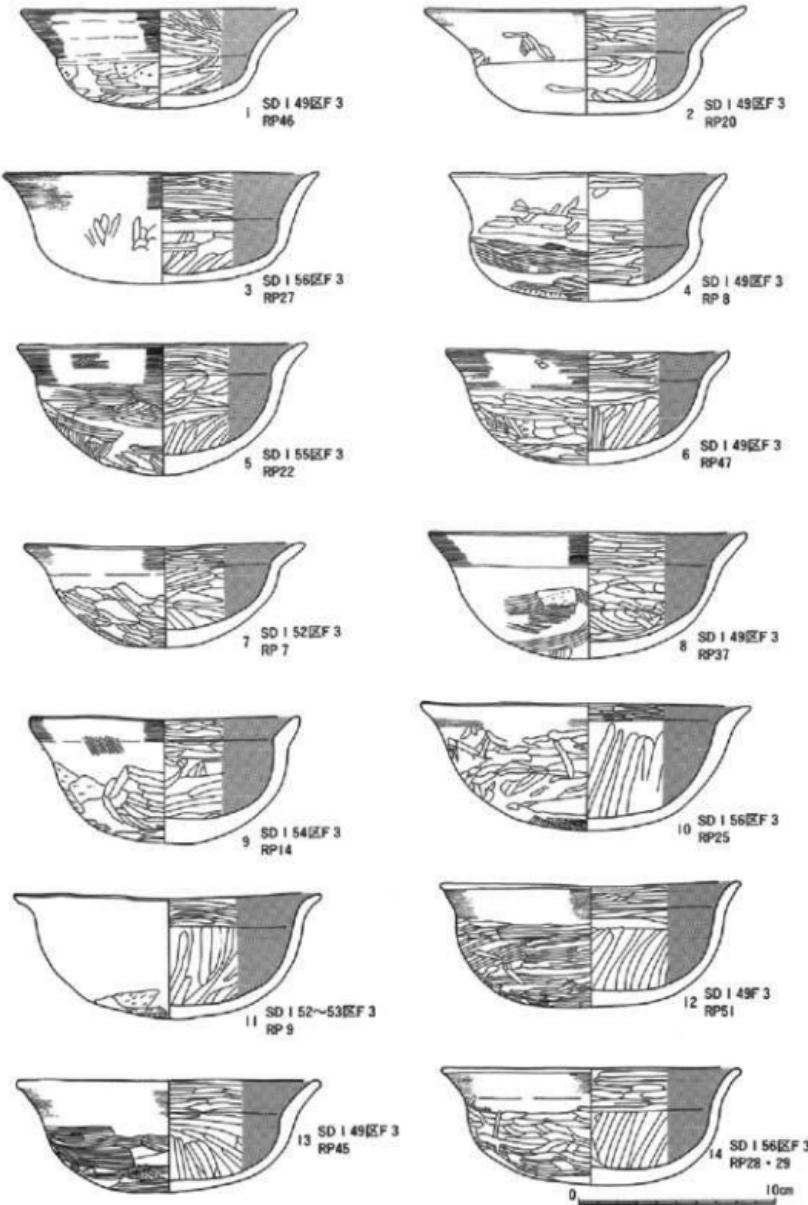
壺 (C)

I類：底部の切り離しが回転ヘラ切りとなるもの。法量により口径が125mm以下のa(57~61)、130mm前後のb(62~65)、135mm以上のc(66~67)に分けられる。墨書き器が2点あるがいずれも判読できない。

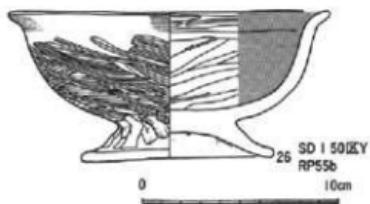
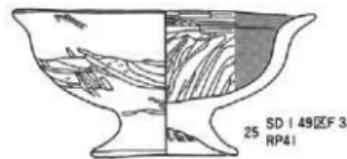
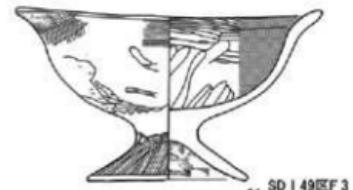
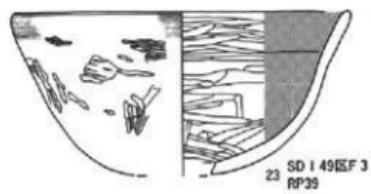
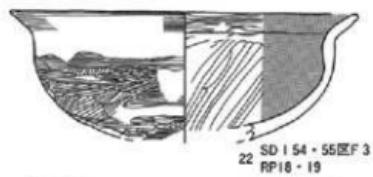
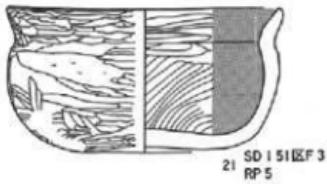
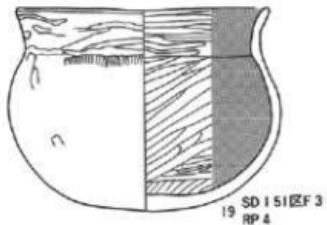
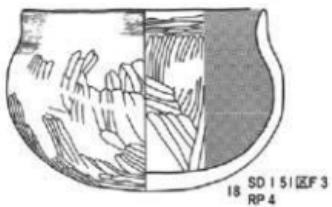
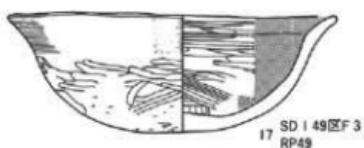
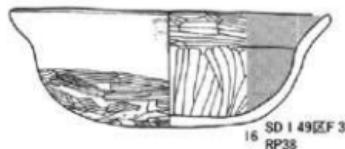
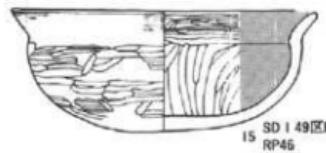
II類：底部の切り離しが回転糸切りとなるもの。身の深い68と浅い69の2点が出土した。

壺 (D)

外面に格子目の叩き、内面にロクロ痕の残る平底の資料が1点出土した(75)。

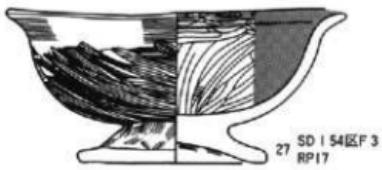


第9図 出土土器(1)

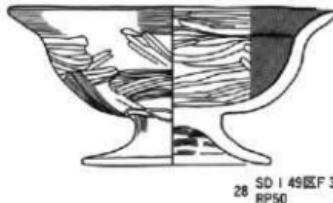


0 10cm

第10図 出土土器(2)



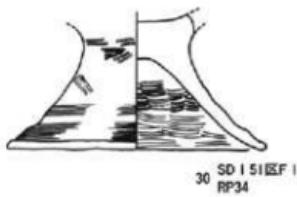
27 SD I 54区F 3
RP17



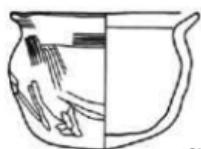
28 SD I 49区F 3
RP50



29 SD I 54区F 3
RP16



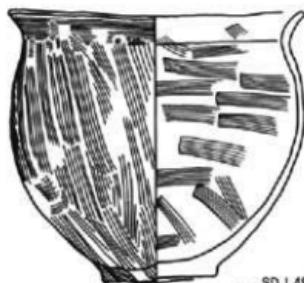
30 SD I 51区F 1
RP34



31 SD I 51区F 1
RP31



32 SD I 49区F 3
RP38



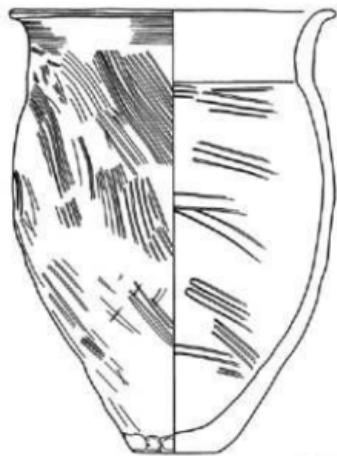
33 SD I 49区F 3
RP43・44



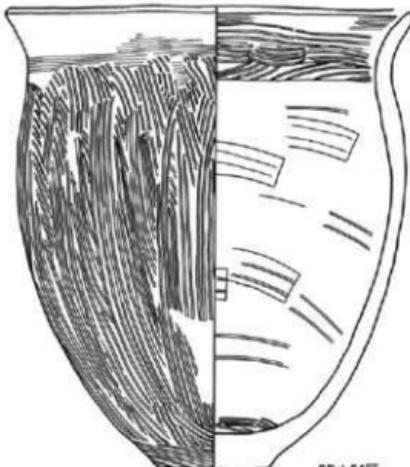
34 SD I 56区F 3
RP26

0 10cm

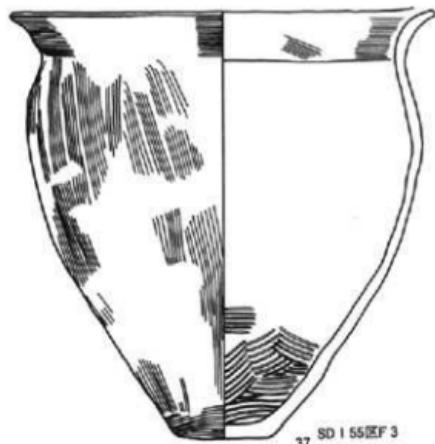
第11図 出土土器(3)



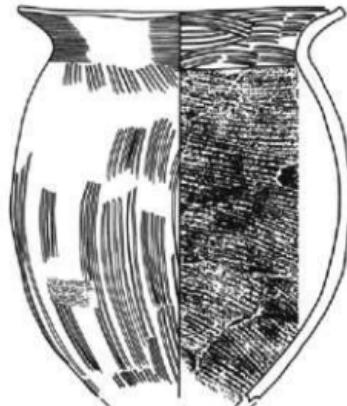
35 SD I 49区F 3
RP42



36 SD I 54区
RP11



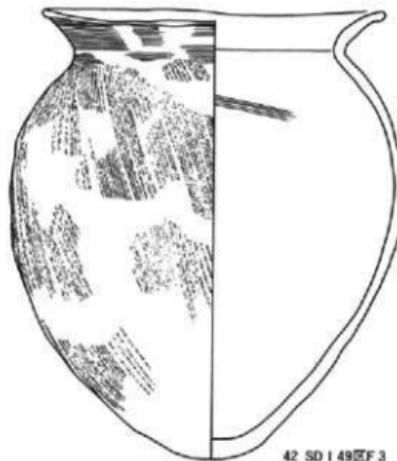
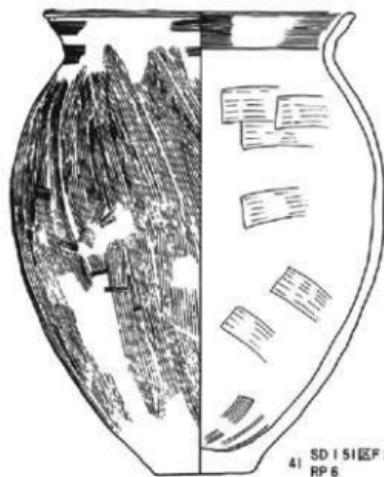
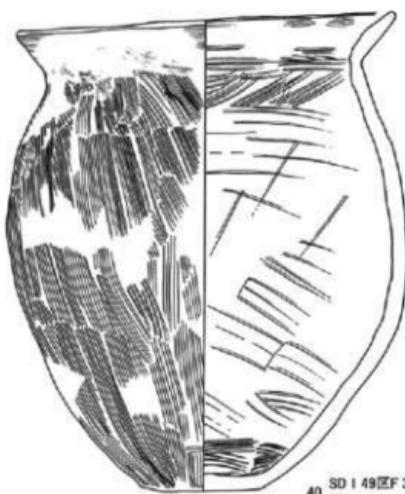
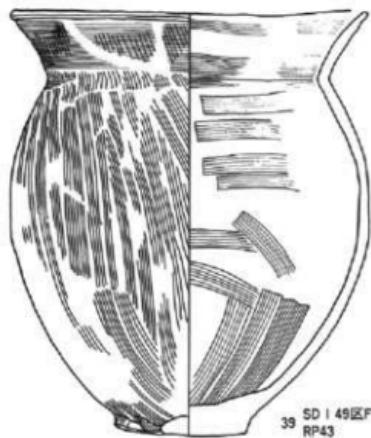
37 SD I 55区F 3
RP24



38 SD I 51区F 1
RP35

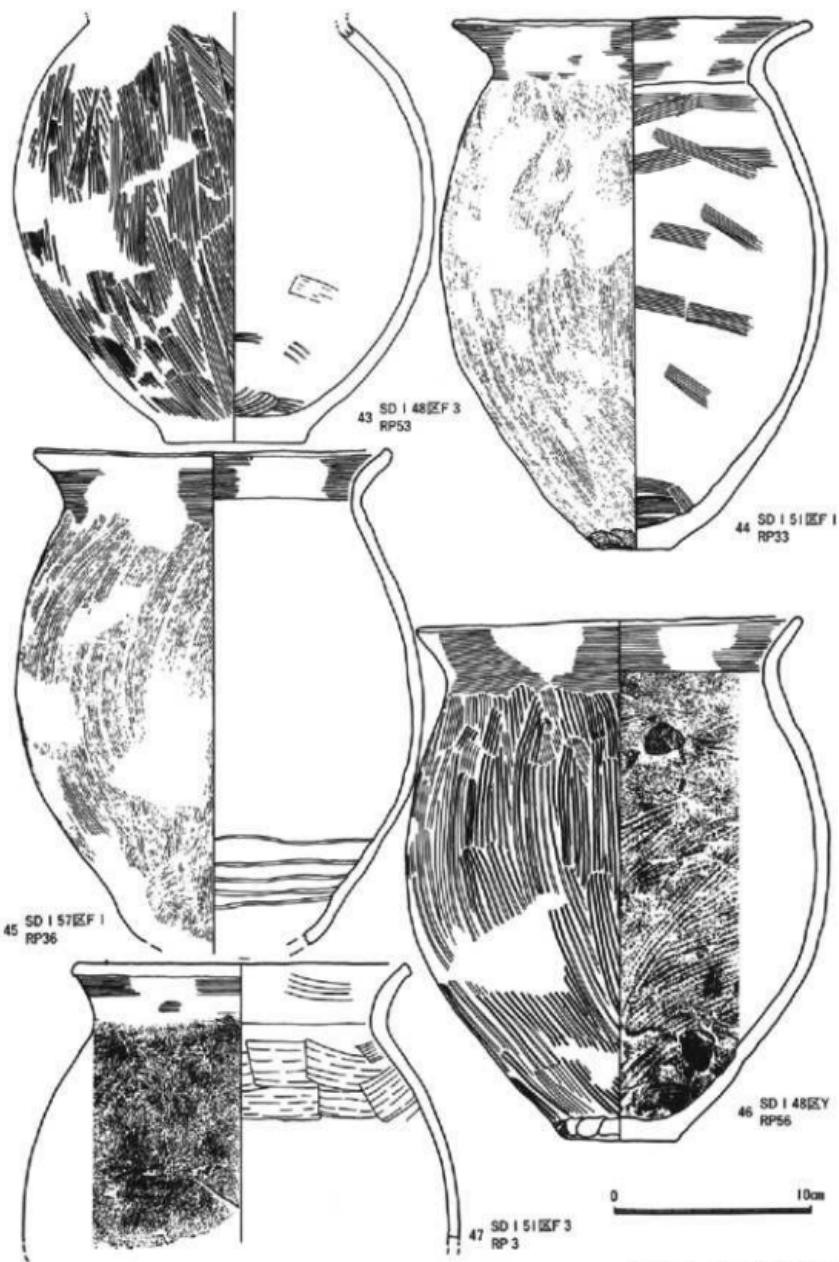
0 10cm

第12図 出土土器(4)

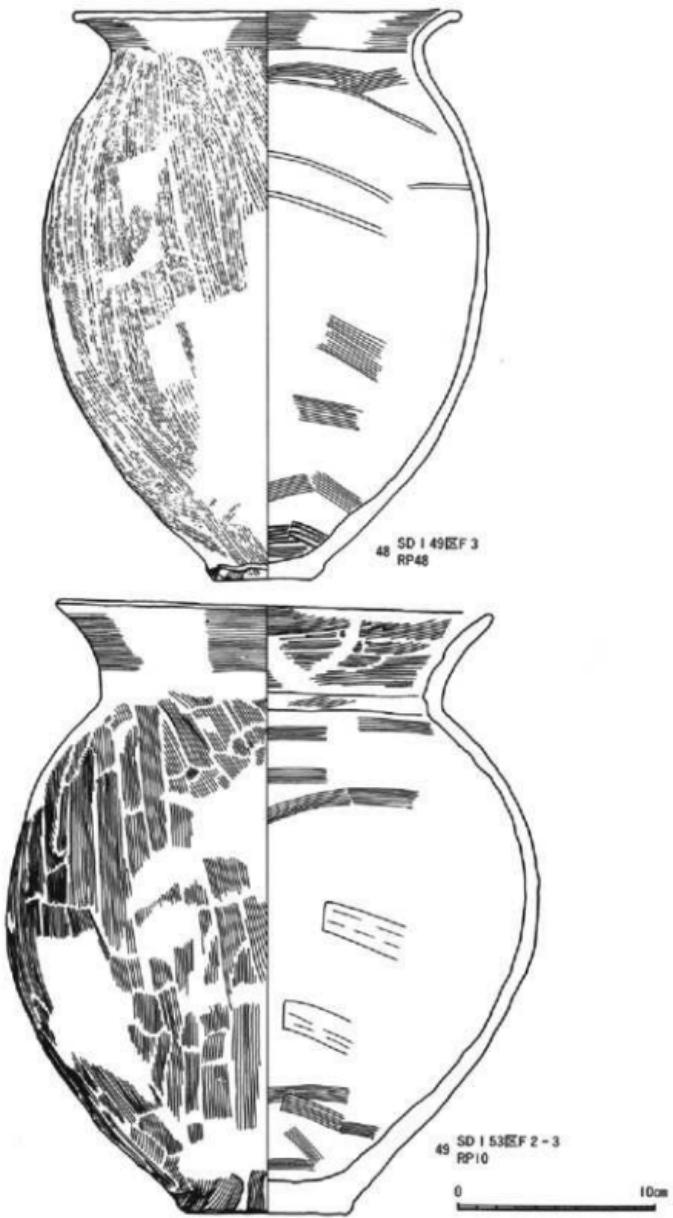


0 10cm

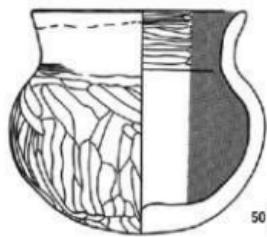
第13図 出土土器(5)



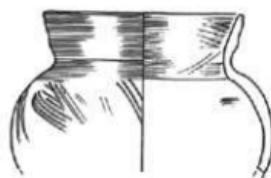
第14図 出土土器(6)



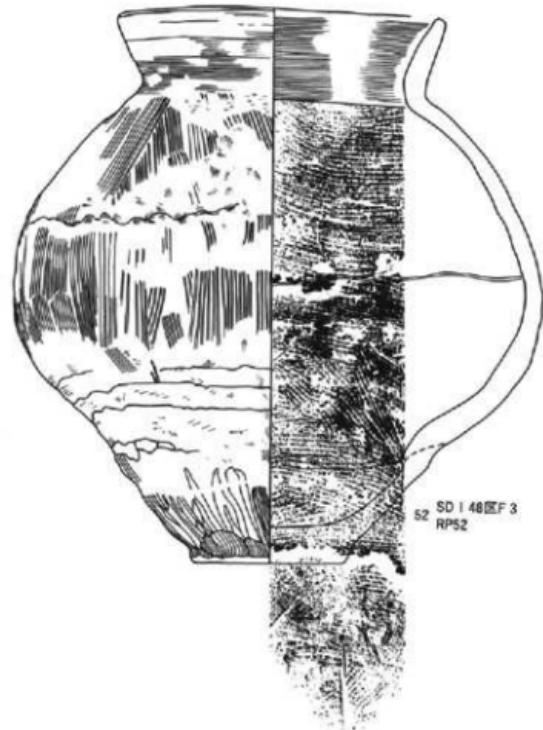
第15図 出土土器(7)



50 SD I 54区F 3
RP12



51 SD I 55区F 3
RP23



52 SD I 48区F 3
RP52



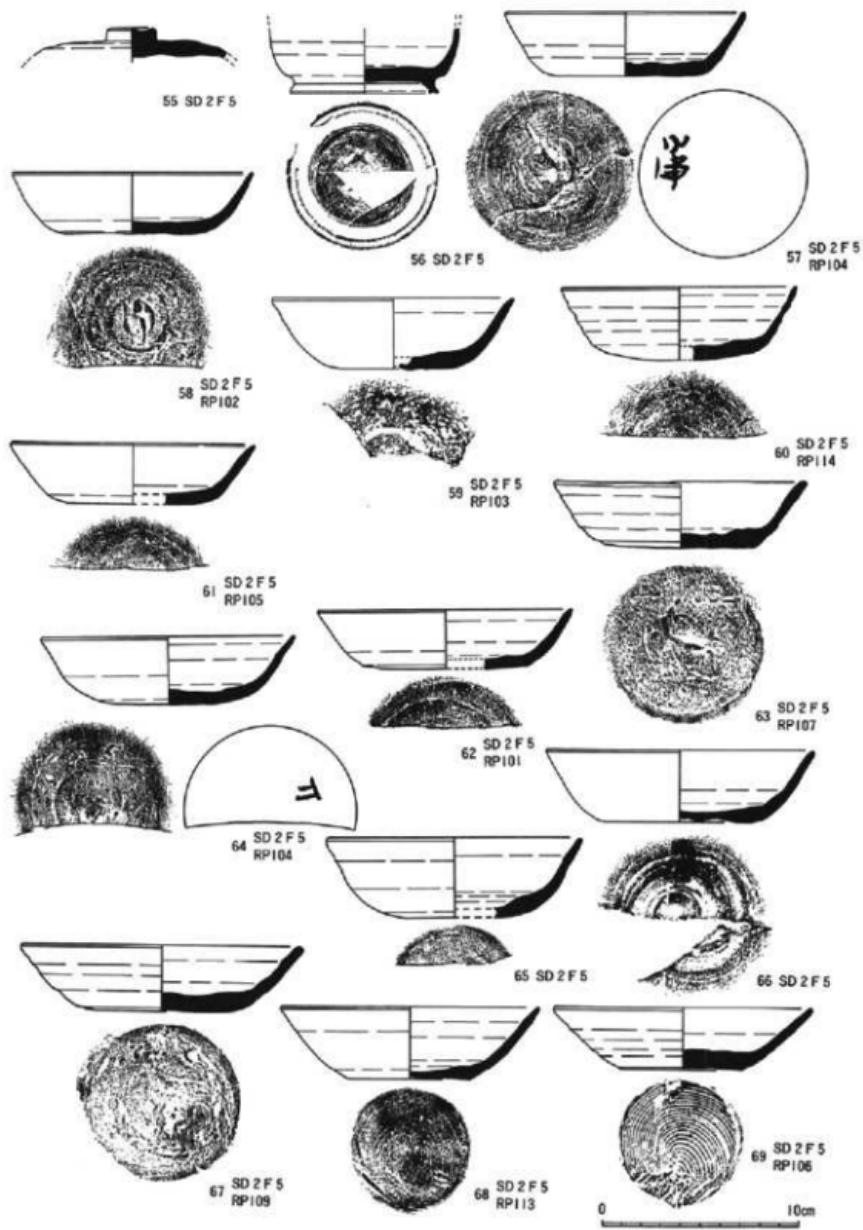
53 SD I 53区F 2 - 3



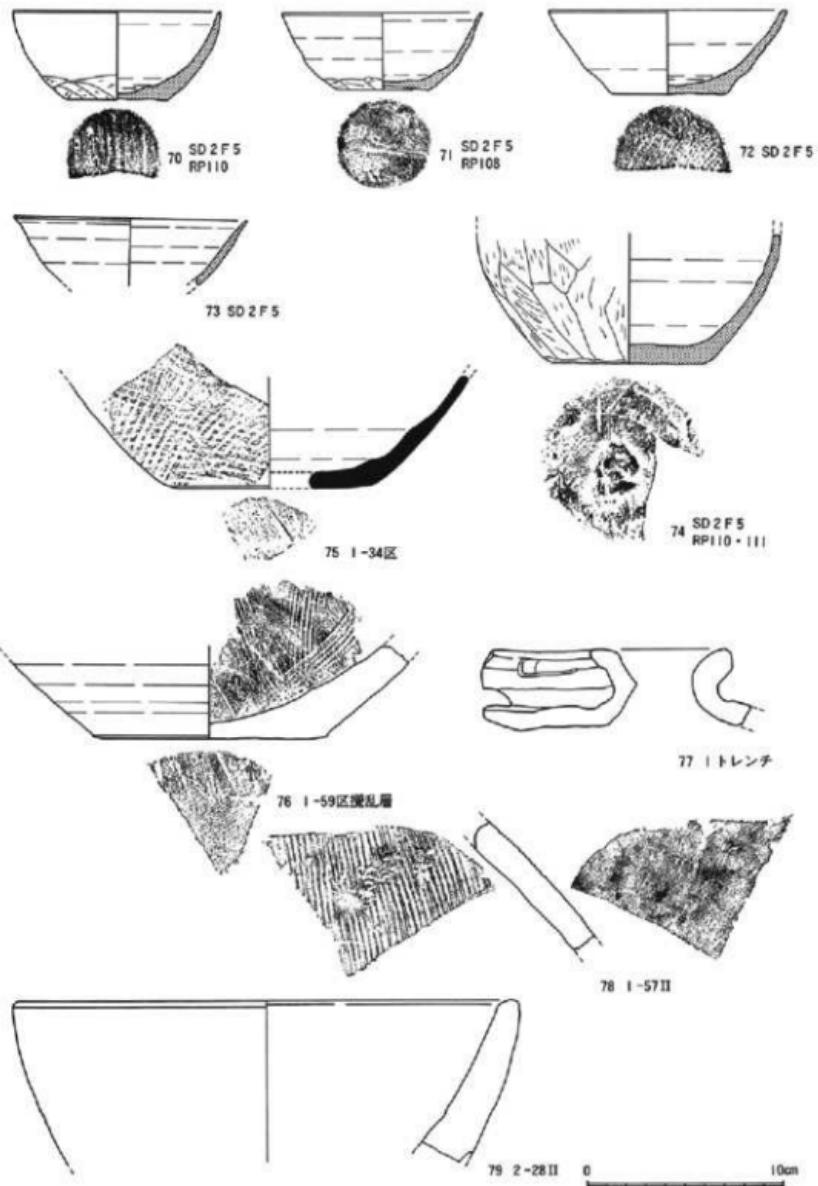
54 SD I 51区F 2 - 3
RP 6

0 10cm

第16図 出土土器(8)



第17図 出土土器(9)



第18図 出土土器(10)、陶器・石製品

赤焼土器（第18図）

坏 (E)

身の深いタイプのものが3点出土した。70は静止糸切りで、71は回転糸切りでロクロから離された後、体部下半に手持ちヘラケズリが施される。72は静止糸切り無調整である。

甕 (F)

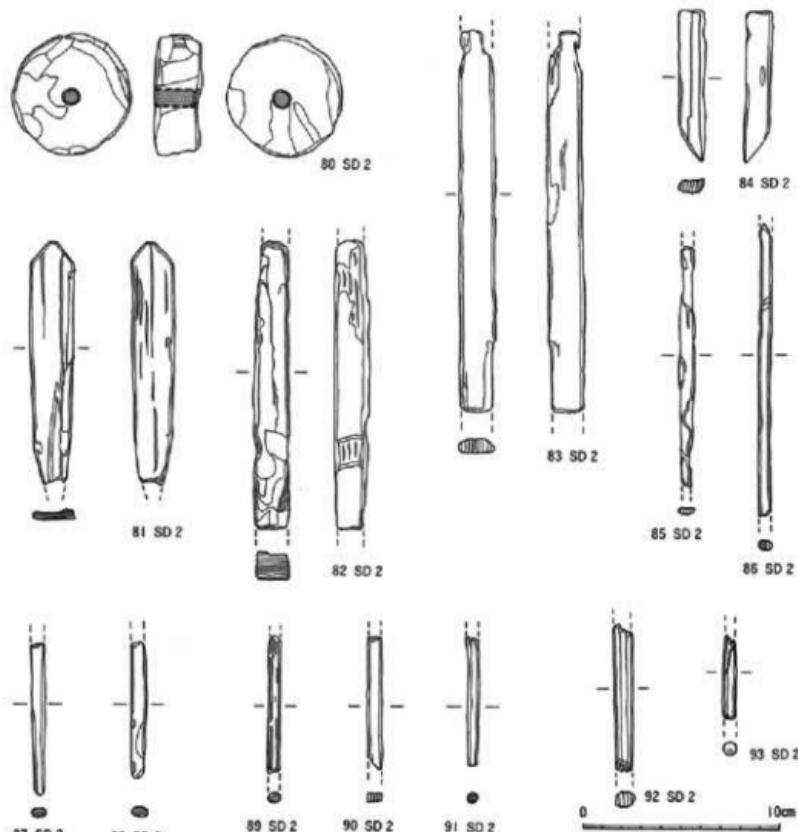
外面の体部下半にヘラケズリが施された底部資料が1点出土している。

木製品（第19図）

S D 2 から独楽(80)、簀串(81～84)、箸(87～91)などが出土している。

(3) 中世（第18図）

遺構外から珠洲系の擂鉢(76)、甕(77・78)、石鉢(79)が出土している。



第19図 S D 2 出土木製品

表-1 出土遺物観察表(1)

標 記 番 号	器 器 番 号	器 種	出 土 位 置	法 盤		圓 盤		分 類	備 考	
				口徑	底径	高さ	外 面	内 面		
9-1	9-1	坪	SD1 2-49区 F3	16.1		7.6	ケズリ、ミガキ、ヨコナデ	ミガキ、黒色處理	A-Ia	RP46
9-2	9-2	#	#	15.9		5.3	ケズリ、ヨコナデ	ミガキ、黒色處理	#	RP20
9-3	9-3	#	SD1 2-56区 F3	16.1		7.7	ハケメ	ミガキ、黒色處理	A-I b	RP27
9-4	9-4	#	SD1 2-49区 F3	14.1		6.6	ミガキ、ハケメ、ケズリ	ミガキ、黒色處理	A-II	RP8
9-5	9-5	#	SD1 2-55区 F3	14.9		6.8	ハケメ、ヨコナデ	ミガキ、黒色處理	A-IIIa	RP22
9-6	9-6	#	SD1 2-49区 F3	14.4		5.8	ケズリ、ミガキ、ヨコナデ	ミガキ、黒色處理	A-IIIb	RP47
9-7	9-7	#	SD1 2-52区 F3	14.3		5.2	ミガキ、ヨコナデ	ミガキ、黒色處理	A-IIIb	RP7
9-8	9-8	#	SD1 2-49区 F3	16.5		6.6	ハケメ、ヨコナデ	ミガキ、黒色處理	A-IIIb	RP37
9-9	9-9	#	SD1 2-54区 F3	13.7		6.4	ミガキ、ケズリ、タテナ ヨコナデ	ミガキ、黒色處理	A-Na	RP14
9-10	9-10	#	SD1 2-56区 F3	16.6		6.6	ハケメ、ケズリ、ヨコナデ	ミガキ、黒色處理	A-Na	RP25
9-11	9-11	#	SD1 2-52区~53区 F3	15.8		6.2	ミガキ	ミガキ、黒色處理	A-Nb	RP9
9-12	9-12	#	SD1 2-49区 F3	15.2		6.1	ハケメ、ヨコナデ	ミガキ、黒色處理	A-Va	RP51、玉縁状
9-13	9-13	#	SD1 2-49区 F3	15.4		5.7	ハケメ、ヨコナデ	ミガキ、黒色處理	A-Va	RP45、玉縁状
9-14	9-14	#	SD1 2-54区 F3	14.0		6.0	ケズリ、ヨコナデ	ミガキ、黒色處理	A-Va	RP28.29、玉縁状
10-15	9-15	#	SD1 2-49区 F3	15.0		6.1	ハケメ、ケズリ、ヨコナデ	ミガキ、黒色處理	A-Vb	RP46
10-16	9-16	#	SD1 2-49区 F3	16.2		6.0	ミガキ、ハケメ、ヨコナデ	ミガキ、黒色處理	A-Vb	RP38
10-17	9-17	#	SD1 2-49区 F3	16.4		6.0	ミガキ、ケズリ、ヨコナデ	ミガキ、黒色處理	A-Vb	RP49
10-18	9-18	#	SD1 2-51区 F3	12.3		9.3	ケズリ、ヨコナデ	ミガキ、黒色處理	A-Via	RP4
10-19	9-19	#	SD1 2-51区 F3	12.5		10.3	ケズリ、ハケメ	ミガキ、黒色處理	A-Vb	RP4
10-20	9-20	#	SD1 2-50区 Y	16.0	6.3	5.8	ハケメ、ヨコナデ	ミガキ、黒色處理	A-Vi	RP55a 平底
10-21	9-21	#	SD1 2-51区 F3	14.1		7.3	ミガキ、ケズリ	ミガキ、黒色處理	A-Vii	RP5
10-22	9-22	#	SD1 2-54~55区 F3	(17.5)		(6.7)	ハケメ、ヨコナデ	ミガキ、黒色處理	A-II	RP18.19
10-23	9-23	#	SD1 2-49区 F3	(17.5)		(8.3)	ミガキ、ケズリ、ヨコナデ	ミガキ、黒色處理	A-II	RP39
10-24	9-24	高坪	SD1 2-49区 F3	15.4	8.1	8.6	ミガキ、ケズリ、ヨコナデ	ミガキ、黒色處理	B-Ia	RP44、玉縁状
10-25	10-25	#	SD1 2-49区 F3	15.5	7.2	7.6	ハケメ、ヘラナデ、ミガキ	ミガキ、黒色處理	B-Ib	RP41、玉縁状
10-26	10-26	#	SD1 2-50区 Y	16.3	9.8	7.6	ハケメ、ヨコナデ	ミガキ、黒色處理	B-II	RP55b
11-27	10-27	#	SD1 2-54区 F3	17.4	9.7	7.8	ハケメ、ヨコナデ	ミガキ、黒色處理	B-IIIa	RP17
11-28	10-28	#	SD1 2-49区 F3	16.5	9.8	8.5	ハケメ、ケズリ、ヨコナデ	ミガキ、黒色處理	B-IIIb	RP50
11-29	10-29	#	SD1 2-54区 F3	16.8	9.9	7.4	手平し、ハケメ、ミガキ ケズリ、ヨコナデ	ミガキ、黒色處理	B-IV	RP18
11-30	10-30	#	SD1 2-51区 F1				ハケメ、ヨコナデ		B-V	RP34
11-31	10-31	#	SD1 2-51区 F1	9.7		7.3	ケズリ、ハケメ、ヨコナデ		C-I	RP31
11-32	10-32	#	SD1 2-49区 F3	17.0			ハケメ、ヘラナデ	ヘラナデ、ハケメ、ヨコナデ	C-II	RP38
11-33	10-33	#	SD1 2-49区 F3	15.6	5.8	14.3	ハケメ	ヘラナデ、ヨコナデ	D-I	RP43.44、玉縁状
11-34	10-34	#	SD1 2-50区 F3	15.8	5.4	18.4	ハケメ、ヨコナデ	ヘラナデ、ヨコナデ	D-II	RP26
12-35	10-35	#	SD1 2-49区 F3	17.0	4.6	22.5	ハケメ	ハケメ、ヘラナデ	D-IIIa	RP42、玉縁状
12-36	10-36	#	SD1 2-54区 F3	21.0	6.0	23.6	ハケメ	ハケメ、ヘラナデ、ハケメ ヨコナデ	D-IIIa	RP11
12-37	10-37	#	SD1 2-55区 F3	20.2	4.8	23.0	ハケメ、ヨコナデ	ハケメ、ナデ、ヨコナデ	D-IIIa	RP24
12-38	10-38	#	SD1 2-51区 F1	16.6	(6.5)	21.0	ハケメ、ヨコナデ	ハケメ、ハケメ	D-IIIb	RP35
13-39	10-39	#	SD1 2-49区 F3	15.2	6.6	21.5	ハケメ、ヨコナデ	ヘラナデ、ヨコナデ	D-IIIb	RP43、玉縁状
13-40	10-40	#	SD1 2-49区 F3	19.9	6.0	24.4	ヘラナデ	ハケメ、ヘラナデ、ハケメ ヨコナデ	D-IIIb	RP44、玉縁状

単位: cm

表-2 出土遺物観察表(2)

番号	同番号	器種	出土位置	法量			測量		分類	備考
				口径	底径	高さ	外観	内観		
13-41	11-41	甕	SD1 2-51区 F3	19.7	4.8	23.8	ヘラナデ、ヨコナデ	ヘラナデ、ヨコナデ	D-IIIc	RP6 玉縁状
13-42	11-42	甕	SD1 2-49区 F3	17.5	2.4	23.6	ヘラナデ、ヨコナデ	ヘラナデ、ヨコナデ	D-IIIc	玉縁状
14-43	11-43	甕	SD1 2-48区 F3	7.1	(21.7)	ハケメ	ハケメ、ヘラナデ	ヘラナデ	D-IIIc	RP53
14-44	11-44	甕	SD1 2-51区 F1	18.4	3.7	27.7	ヘラナデ、ヨコナデ	ヘラナデ、ヨコナデ	D-IIa	RP33
14-45	11-45	甕	SD1 2-51区 F1	18.1	(26.3)	25.7	ヘラナデ、ヨコナデ	ヨコナデ	D-IIb	RP36、玉縁
14-46	11-46	甕	SD1 2-48区 Y	19.6	6.3	27.1	ハケメ、ヨコナデ	ハケメ、ヘラナデ、ヨコナデ	D-IIb	RP56
14-47		甕	SD1 2-51区 F3	16.7			ヘラナデ	ヘラナデ、ハケメ、ヨコナデ	D-IIb	RP3、玉縁
15-48	11-48	甕	SD1 2-49区 F3	19.8	5.2	29.1	ヘラナデ、ヨコナデ	ヘラナデ、ハケメ、ヨコナデ	D-IIb	RP48、玉縁
15-49	11-49	甕	SD1 2-53区 F2-3	23.3	7.8	31.3	ハケメ、ヨコナデ	ハケメ、ヘラナデ、ハケメ	D-V	RP10
16-50	12-50	甕	SD1 2-54区 F3	19.8		11.2	ミガキ	ミガキ、黒色処理	E-Ia	RP12
16-51		甕	SD1 2-55区 F3	19.2			ハケメ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ	E-Ib	RP23
16-52	12-52	甕	SD1 2-48区 F3	16.4	7.7	28.1	ハケメ、ヨコナデ	ハケメ、ヨコナデ	E-II	RP52
16-53		环置	SD1 2-53区 F2-3	14.0			ロクロ		F-I	
16-54	12-54	环身	SD1 2-51区 F2-3	12.4		5.2	ロクロ、体部下部～回転 ハケメ	ロクロ	F-II	RP6
17-55	12-55	甕	SD2 F5			1.6	ロクロ	ロクロ	A	
17-56	12-56	油面付	SD2 F5	9.4	7.6	3.3	ロクロ	ロクロ	B	底部(回転へラ切り、付高)
17-57	12-57	环	SD2 F5	12.1	8.4		ロクロ	ロクロ	C-Ia	底部(回転へク切り、墨書き)
17-58	12-58	环	SD2 F5	12.4	7.4	3.2	ロクロ	ロクロ	C-Ia	底部(回転へラ切り)
17-59	12-59	环	SD2 F5	12.4	6.4	3.5	ロクロ	ロクロ	C-Ia	底部(回転へラ切り)
17-60	12-60	环	SD2 F5	12.0	6.0	3.7	ロクロ	ロクロ	C-Ia	底部(回転へラ切り)
17-61	12-61	环	SD2 F5	12.4	7.0	3.2	ロクロ	ロクロ	C-Ia	底部(回転へラ切り)
17-62	12-62	环	SD2 F5	13.1	7.0	3.6	ロクロ	ロクロ	C-Ib	底部(回転へラ切り)
17-63	12-63	环	SD2 F5	12.8	7.7	3.5	ロクロ	ロクロ	C-Ib	底部(回転へラ切り)
17-64	12-64	环	SD2 F5	13.0	4.4	4.0	ロクロ	ロクロ	C-Ib	底部(回転へク切り、墨書き)
17-65	12-65	环	SD2 F5	13.0	5.0	4.1	ロクロ	ロクロ	C-Ib	底部(回転へラ切り)
17-66	12-66	环	SD2 F5	13.5	8.0	3.7	ロクロ	ロクロ	C-Ic	底部(回転へラ切り)
17-67	12-67	环	SD2 F5	14.5	8.0	3.4	ロクロ	ロクロ	C-Ic	底部(回転へラ切り)
17-68	12-68	环	SD2 F5	13.3	6.2	3.7	ロクロ	ロクロ	C-II	底部(回転無切り)
17-69	12-69	环	SD2 F5	13.4	6.2	3.2	ロクロ	ロクロ	C-II	底部(回転無切り)
18-70	12-70	环	SD2 F5	10.6	5.0	5.7	ロクロ、下端手持ちヘラゲ アズリ	ロクロ	E-I	底部(静止無切り)
18-71	12-71	环	SD2 F5	10.2	4.5	4.2	ロクロ、下端手持ちヘラゲ アズリ	ロクロ	E-I	底部(回転無切り)
18-72	12-72	环	SD2 F5	12.0	6.0	4.4	ロクロ	ロクロ	E-II	底部(静止無切り)
18-73		环	SD2 F5	12.0		3.3	ロクロ	ロクロ	E-II	
18-74	12-74	甕	SD2 F5	15.6	8.0		ヘラケズリ	ロクロ	F	底部(ナゲ)
18-75		I	I-34区	10.2			舟子目タキ	ロクロ	D	底部
18-76		瓶鉢	I-59区横丸層	12.0			ロクロ	オロシメ		中世陶器、底部(静止無切り、タキ)
18-77		甕	Iトレンチ				ロクロ	ロクロ		中世陶器
18-78		甕	I-57II				舟縁状タキ	輪文ナテ		中世陶器
18-79		石割鉢	I-28II	26.6						クリヌキ

東京社:cm

VI まとめ

1 古墳時代の遺構と遺物

今回の発掘調査で検出した古墳時代の遺構は第2トレンチのSD1、SK3、第3トレンチのSK6、7、SX9等があるが、残念ながら住居跡は検出されなかった。第3トレンチで検出された土坑等の遺構も底面が僅かに残っているだけで、遺跡全般にわたって大きく削平を受けているものと考えられる。

SD1からは底面にのる状態で完形に近い土器が多数得られた。溝内の土器については、通常、竪穴や土坑内の一括土器よりは、時間幅をもつと考えるのが自然であるが、本遺構では破片が少なく、完形になる確率が極めて高いということも考え合わせると、一括性の度合いが高いものと判断できる。それぞれの器種は数種に分類され、一見すると多様なあり方を示しているように見受けられる(第20図)。しかし、矢馳A遺跡のST13やSD76からまとまって出土した土器(阿部他1988)や、助作遺跡ST9の出土土器(黒坂1990)も同様なあり方を示しており、SD1から出土した土器の一括性を否定するものとはならないと考える。また、SD1の土師器の各器種と須恵器は矢馳A、助作の上記遺構の出土土器との類似性を指摘できる。従って、SD1の土器群の年代は、矢馳A、助作の上記遺構で示された6世紀第2から第3四半期の所産と見てよいだろう。近接する6世紀中葉の矢馳A、助作遺跡は本遺跡と同時存在の集落の可能性が高いものと考えられる。

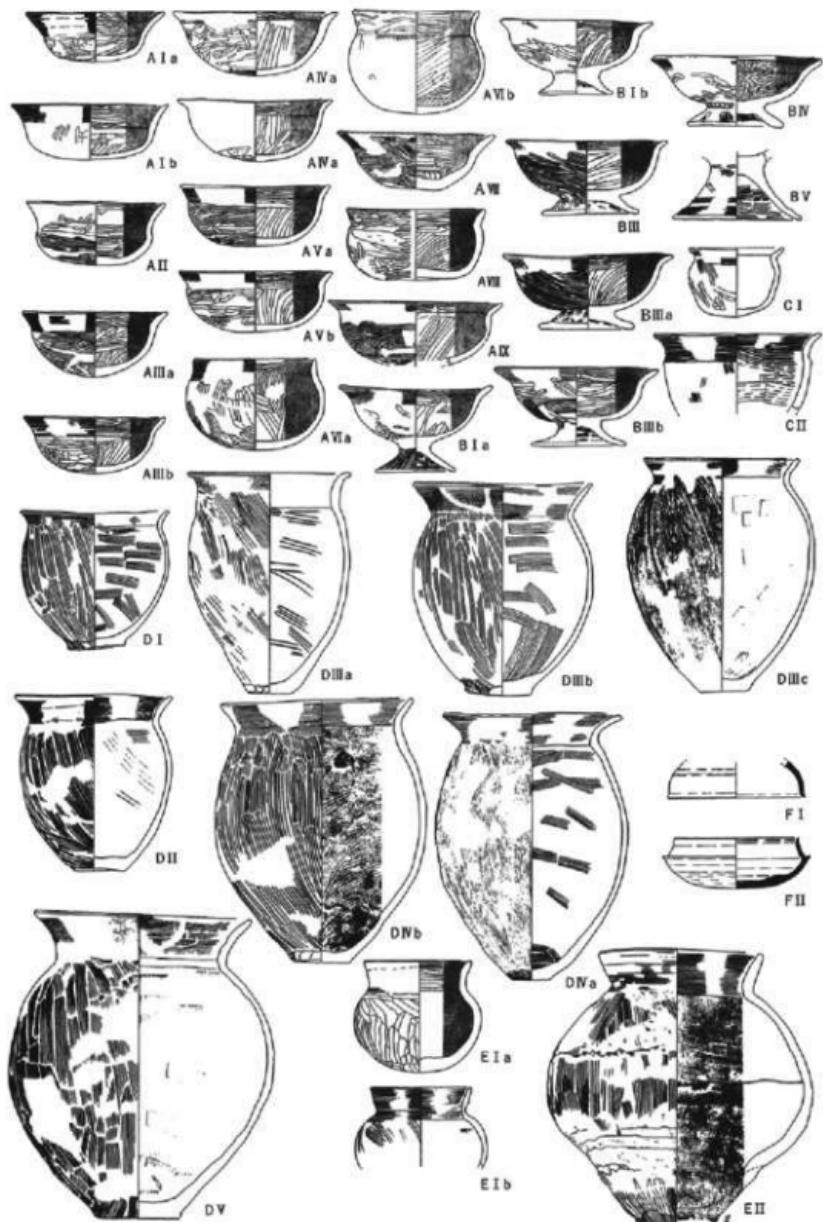
2 平安時代の遺構と遺物

平安時代の遺構も大溝SD2が検出されただけで、その他の遺構は発見されなかった。

この堆積土の5層から平安時代の土器が出土した。回転ヘラ切りの須恵器坏を主体とし、若干の糸切りの須恵器坏と再調整のある赤焼土器坏が得られている。須恵器の坏、そして坏蓋の形態は本遺跡の東方1kmにある月記遺跡の旧河川跡から平成元年度に出土したもの(山形県教育委員会1990)との類似性を指摘できる。また、赤焼土器で体部下端にヘラケズリが施される坏は、庄内地方では藤島町平形遺跡の跨り地区の2点の出土資料に次いで2例目の出土となった。歴史時代の田川郡では現在のところ最も古い9世紀第一四半期の所産と考えられる。

参考文献

- 川崎利夫(1972) 「庄内平野の土師式土器・鶴岡市矢馳の土師式土器を中心として」『庄内考古学』第11号pp10~18
小野 忍(1980) 「山形県における古式須恵器の標相」『庄内考古学』第17号pp 1~29
川崎利夫(1980) 「古墳時代の庄内地方」『庄内考古学』第17号pp21~30
川崎利夫・佐藤庄一・野尻 健・長橋 実(1980) 「平形遺跡・周辺遺跡」山形県埋蔵文化財調査報告書第26集
阿部明彦・黒坂雅人・吉田洋一(1988) 「矢馳A遺跡 矢馳遺跡 青木新田道路用地調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第127集
阿部明彦・吉田洋一(1989) 「助作遺跡 山田遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第145集
山形県教育委員会(1990) 「分布調査報告書(17)」山形県埋蔵文化財調査報告書第148集
黒坂雅人(1990) 「助作遺跡発掘調査報告書(1)」山形県埋蔵文化財調査報告書第162集



第20図 土器分類図

図 版



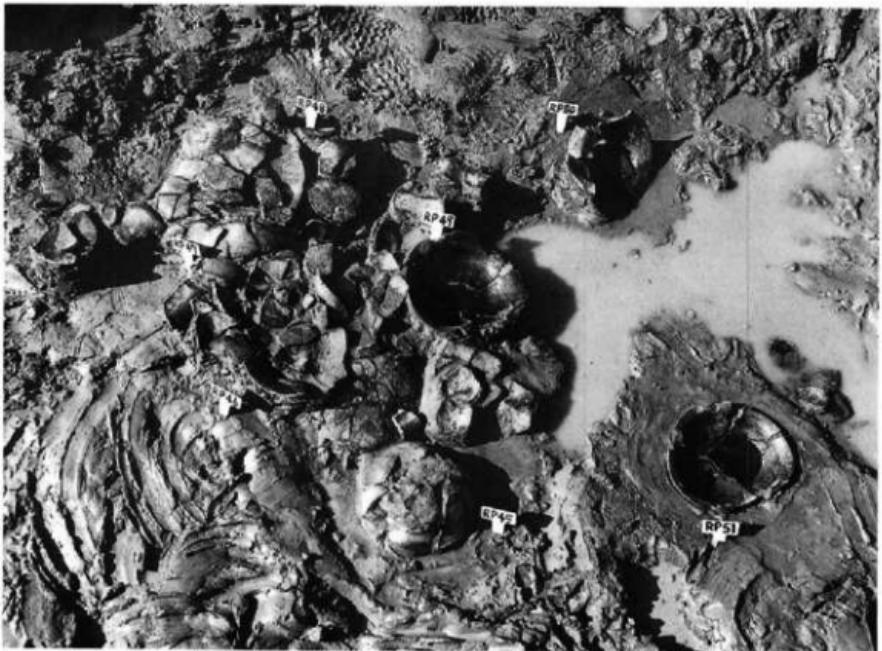
遺跡遠景（西から）



SD 1 完掘（東半）



SD 1 RP 32~44 出土状況（南から）



SD 1 RP 45~51 出土状況（南東から）



第1トレンチ全景（東から）



第2トレンチ発掘前（西から）



S K 3 RP55a 出土状況（北から）



第2トレンチ SD 1 検出状況（西から）



第2トレンチ SD 1 土層断面 ①



第2トレンチ SD 1 土層断面 ②



SD 1 完成（西から）



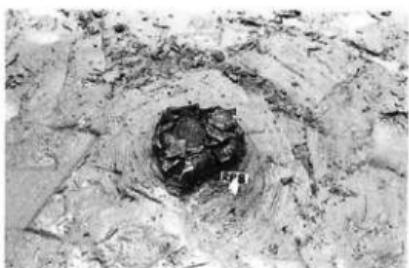
SD 1 完成（9月）（東から）



SD 1 RP 4, 5, 6出土状況（北から）



SD 1 RP 7出土状況（北東から）



SD 1 RP 8出土状況（北西から）



SD 1 RP 10出土状況（北から）



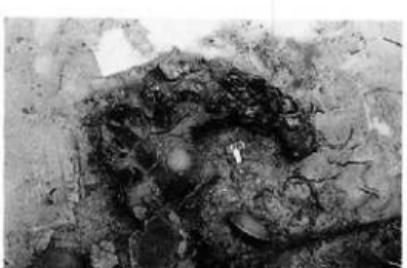
SD 1 RP 11, 12出土状況（北から）



SD 1 RP 13, 14出土状況（南から）



SD 1 RP 14出土状況（南から）



SD 1 RP 15, 16出土状況（南から）



SD 1 RP16出土状況（南から）



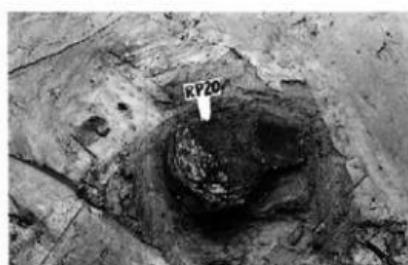
SD 1 RP17出土状況（北から）



SD 1 RP18出土状況（北から）



SD 1 RP19出土状況（北から）



SD 1 RP20出土状況（北から）



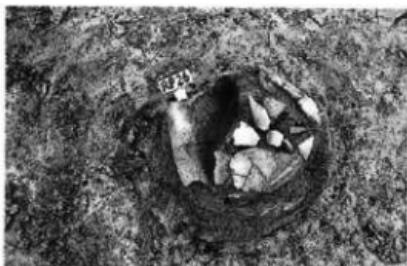
SD 1 RP22出土状況（東から）



SD 1 RP23出土状況（東から）



SD 1 RP25出土状況（北から）



SD 1 RP 25出土状況 (北から)



SD 1 RP 27出土状況 (北東から)



SD 1 RP 28、29、30出土状況 (北西)



SD 1 RP 31出土状況 (南から)



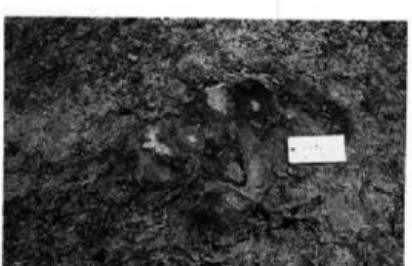
SD 1 調査状況 (西から)



SD 1 RP 52~54出土状況 (南西から)



SD 1 RP 55b出土状況 (北から)



SD 1 RP 56出土状況 (北から)



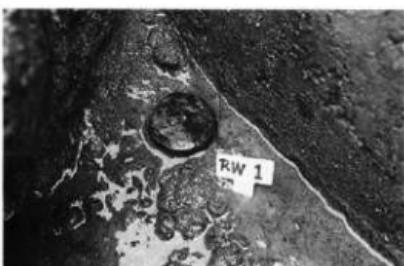
第2トレンチ20~45区土色変化



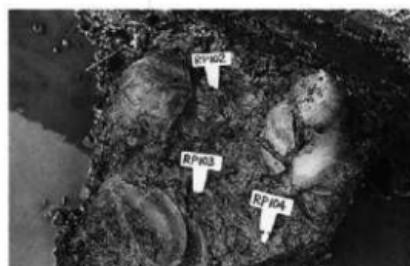
第2トレンチSD 2調査状況



SD 2 土層断面（南から）



SD 2 RW 1出土状況（南東から）



SD 2 RP 102~104出土状況



SD 2 RP 105出土状況（南から）



SD 2 RP 107出土状況（南から）



SD 2 RP 108出土状況（北から）



SD 2 RP 109、110出土状況（北から）



SD 2 RP 113出土状況（北から）



SD 2 RP 114出土状況（北西から）



第3トレンチ基本層位（南から）



第3トレンチ 8~14区遺構検出状況（西から）



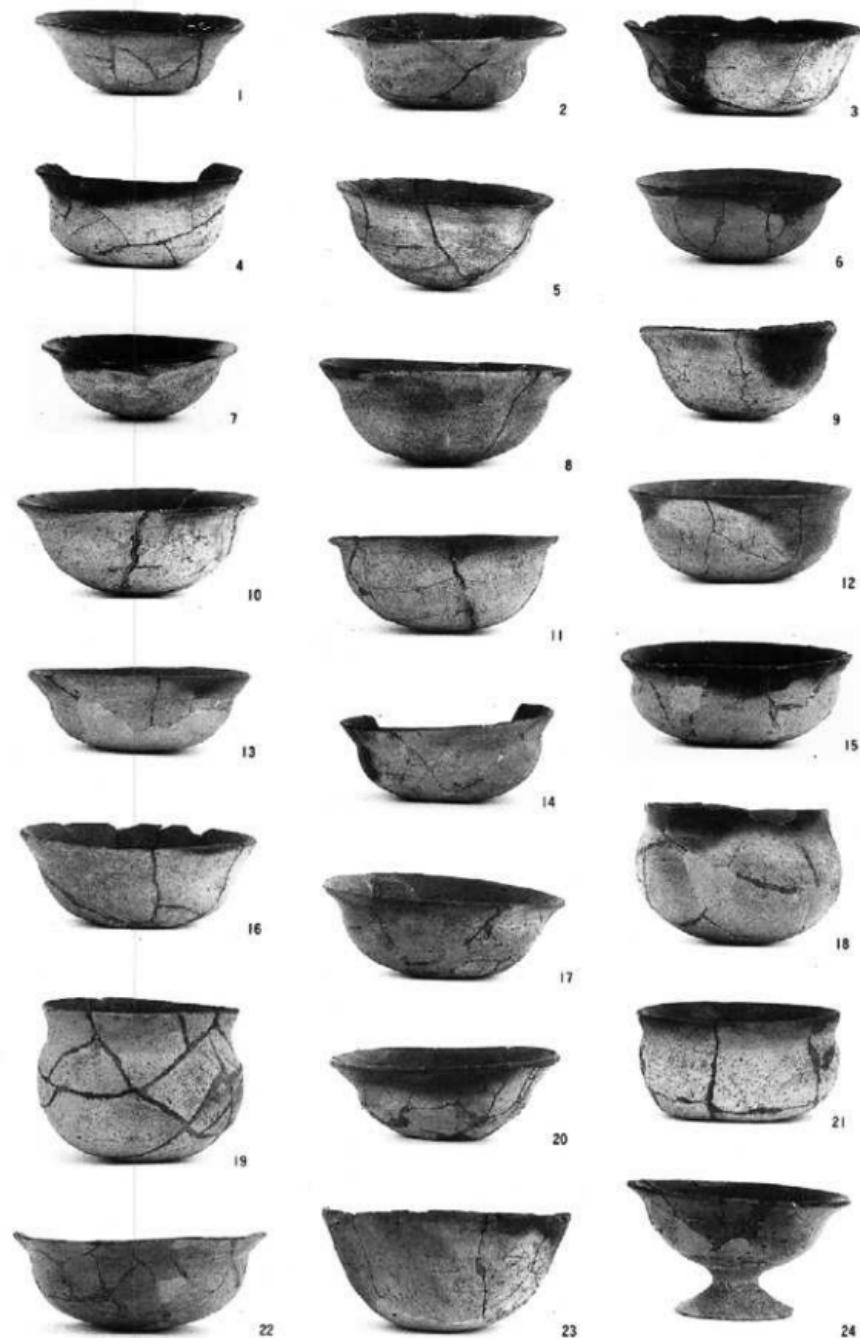
SK 6完掘（北西から）



SK 7完掘（西から）



SK 9完掘（南東から）





25



25



27



28



29



30



33



37



31



35



34



36



38



39



40

43



49



45



41



44



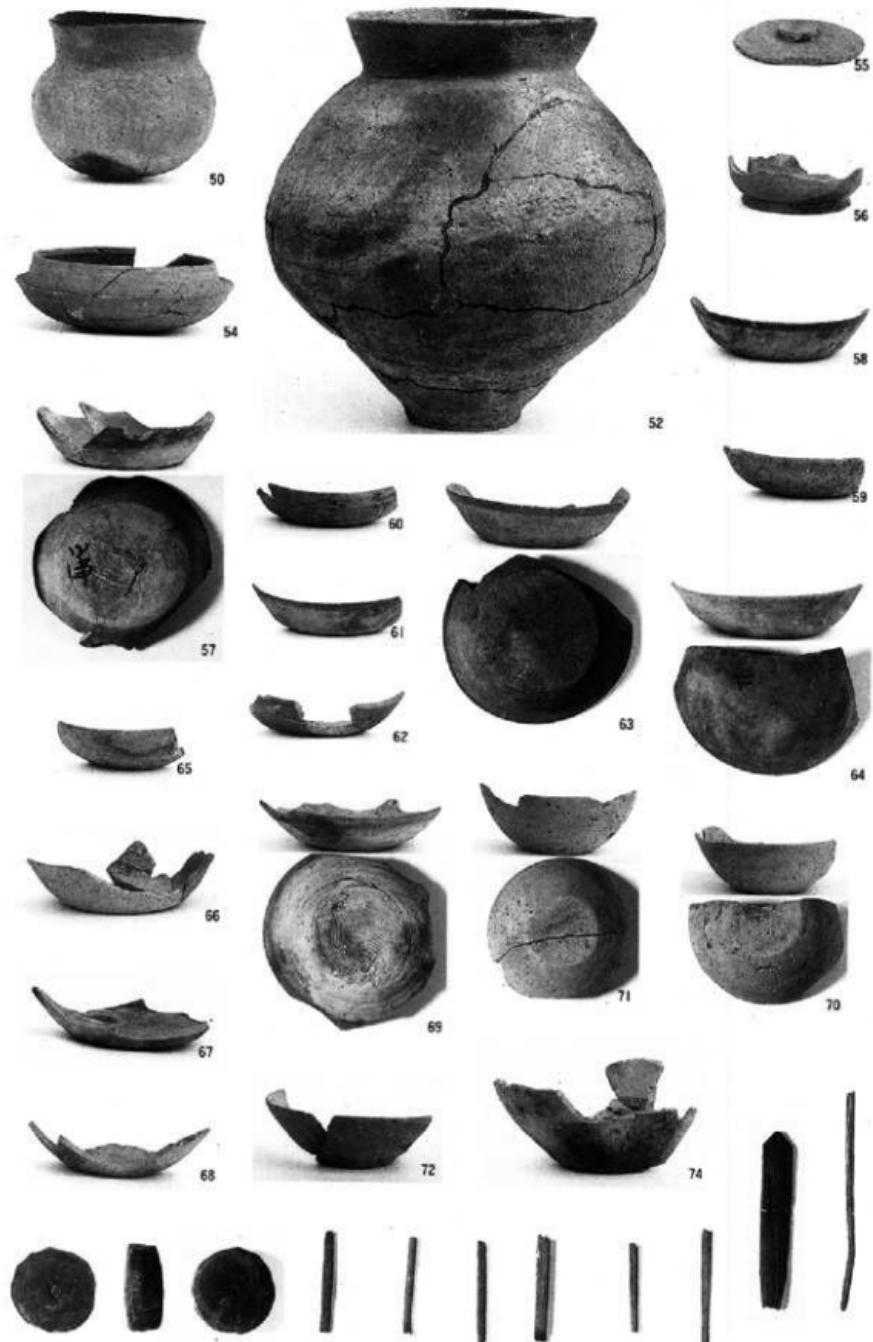
46

42



42

図版 12



山形県埋蔵文化財調査報告書第167集

かこ ち だ
田 遺 跡
発掘調査報告書

平成3年3月15日 印刷
平成3年3月20日 発行

発行 山形県教育委員会
印刷 大場印刷株式会社
